

明治トラベル業の創始者伊藤鶴吉
-イザベラ・バードから贈られた懐中時計の行方-

メタデータ	言語: 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長尾,史郎, 高畑,美代子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000213

明治トラベル業の創始者伊藤鶴吉 —イザベラ・バードから贈られた懐中時計の行方—

長尾史郎

高畑美代子

The Founding Father of the Profession of Private Interpreter-guiding in the Meiji Era, Tsurukichi Ito: Final Destiny of the Watch Donated Him by Isabella Bird

Keywords: Isabella Bird, Tsurukichi Ito, pocket watch, Licensed Guides' Association

In the early years of Meiji, when, after the opening of Japan to the world at the end of the Tokugawa shogunate, foreign visitors began to come to our country, private interpreter-guiding was established as a profession in Japan. Private interpreter-guides who were given birth in the early Meiji era in the cities as Yokohama as well as Kōbe did not belong to any organization, and they did not only worked as interpreters accompanying foreign travellers, but they did every thing concerning their every-day life for them, and even worked as private servants, taking care of them and made foods for them, who used to be unaccustomed to Japanese meals. The British lady traveller Isabella Bird, who visited Japan in 1878, travelled to Niigata via Nikko, then along the Japan Sea coast as

far as to Hokkaidō, taking Itoh with her, who was an interpreter-guide cum servant to her, and, after returning home to England, in 1880 published a book of travel in London. The book made her a famous travel writer, as well as made Ito the most famous Japanese interpreter-guide in Meiji era known in the west. In 1880 Bird trusted a silver hunting watch to Sir Harry Parkes who was then back home in England, to send it to Ito. The watch, though trusted to Basil H. Chamberlain, who was to return to Japan earlier than Parks, was not sure to be handed to Ito. Actually, Itoh received the watch, but it was lost into the sea. The circumstances were described in a book of travel of British journalist Henry Lucy. Lady Bird's encounter with the interpreter-guide cum servant Tsurukichi Ito was the first step to the birth of a full-scale travel-guides in Japan, and to the creation of a new profession of interpreter-guiding. Itoh followed as an interpreter-guide long journeys of the plant-hunter Charles Maries, as well as the entomologist George Lewis, and acquired technical knowledge and skill, and in the travel with Henry William Lucy, he became conscious of the way of thinking in the light of travelling, and also set up as well as experienced a gorgeous travel with Hugues Krafft, the eldest son of the French Champagne syndicate, thus stepped up to the summit of Japanese interpreter-guiding. He organized, based on his experiences, with his co-workers, the first Japanese association of interpreter-guiding "Licensed Guides' Association of Yokohama," and served as its first chairman.

はじめに

幕末の日本開国により諸外国から人々が訪れるようになった明治初期に、日本で民間通訳ガイド業が誕生した。それまで外国との通訳者は通詞と呼ば

れた通訳を専門とする幕府役人であった。明治期に横浜や神戸に誕生した民間通訳ガイドは当初組織に属さず、旅行者と共に旅をして通訳をするだけでなく、一切を取り仕切り、日本食に不慣れな西洋人のために、自ら身の回りの世話や料理までこなす通訳兼召使いともいうべきものだった。その役割から ^{サーバント} ^通 ^訳 'a servant interpreter' という単語が用いられた。この単語を用いているのは、1878 [明治 11] 年来日した英国のレディ・トラベラー、イザベラ・バード (Isabella Bird, 1831-1904) である。彼女は、通訳兼召使いのイトーこと伊藤鶴吉 (1858-1913) を連れて日光・東北・北海道に到る旅行をし、帰国後の 1880 年にロンドンで日本旅行記 *Unbeaten Tracks in Japan*¹⁾ を出版した。彼女はその中でイトーを 'a servant interpreter' と記し、その関係は、別れの日まで、a master と a servant であった。彼女は「[[イトー]を正当な主人のところに返すことに手はずを決めた」²⁾、別れの日には「彼は男らしい立派な主人のところに行く」³⁾ と述べており、イトーとの関係を主従関係と捉えている。だが、バードの日本旅行記の成功は彼女を著名な旅行記作家にただけでなく、イトーをも、明治期、欧米に名を知られた最も有名な日本人ガイドにした。バードの旅行記以後、イトーを雇った西洋人たちは彼らの旅行記に、イトーに対して ^{サーバント} servant という単語を用いず ^{ガイド} guide と記す。バードは日本東北・北海道旅行の成功をイトーに帰し、彼に銀の蓋付懐中時計を贈ろうとしていた。それはチェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)⁴⁾ 研究者でもあった楠家重敏 (1952-2022) から送られてきた一連のバードからチェンバレン宛ての書簡の中で判明した。しかしその時計が伊藤の手に渡ったかどうかの確認はとれていなかったが、拙稿「イザベラ・バードが通訳のイトーに贈った懐中時計と伊藤の写真同定」⁵⁾ を読んだ楠家の友人でもあり、同じくチェンバレン研究者でもあるクロニン (Joseph Cronin) から送られてきた 1 通の手紙によりその懐中時計の行方の顛末が判明した。それは英国のジャーナリストのヘンリー・ルーシー (Henry William Lucy, 1842-1924) の旅行記 *West by East* に記されていた。本稿で

は、その拙訳を用いて懐中時計の行方の顛末を示す。また改めて浮上した伊藤の年齢問題を再検討する⁶⁾。またルーシーの記述により伊藤の通訳ガイドとしての初期10年の空白期間が埋まった。伊藤の通訳ガイドとしての旅の初期10年を示し、^{サーバント 通 訳} servant interpreter から ^{ガイド} guide へ変容を遂げた伊藤鶴吉像を構築する。本稿中「イトー」と「伊藤」が混在しているが、特に西洋人がイトーとして記している場合はイトー、通訳の既知の伊藤鶴吉として筆者が記す場合は伊藤とした。本稿では、引用文を「」にし、文中の括弧は‘ ’に筆者追加は「」とした。

I. イザベラ・バードが通訳兼召使いイトーに贈った銀の蓋付懐中時計の行方

1. チェンバレンに宛てたイザベラ・バード・ビショップの書簡⁷⁾

イトーはバードが初めて雇った通訳兼召使い (a servant interpreter) だった。大英帝国圏外の日本旅行で彼女は初めて旅に通訳兼召使いを必要とした。当時 ^{サーバント} servant は冒険旅行に不可欠なものだった。彼女はそれを確保したと伝記作家アンナ・ストダート (Anna M. Stoddart, 1840-1911) は次のように述べている。「とうとうサーバントは確保された——『日本奥地紀行』の読者であるならば周知の‘イトー’だ⁸⁾」。そのイトーにバードは、日本旅行から3年後、貴重な銀の蓋付懐中時計を贈った。

以下にそれを示すイザベラ・バード・ビショップからチェンバレンに宛てた書簡の抜粋を示す(訳及び「」内、高畑)。なお、書簡署名はミス・バードではなく、結婚後の Isabella L. Bishop または Mrs. Bishop になっているので書簡に関する部分はイザベラまたはイザベラ・バードとした。

書簡1. イザベラ、チェンバレン、パークスの3人はイギリス滞在中⁹⁾

1881年1月11日 エディンバラ、ラトランド・スクエア 28

「私が7月にハリー・パークス卿に預けた時計を何でも屋のイトーに贈りたいと切望しております。もし、あなたがそれを〔日本に〕持って行ってくださるのが、ご迷惑でないならば、ハリー卿からお受け取り下さいますようお願いできれば、うれしく存じます。 追伸 ハリー卿とご令嬢よろしくお伝えください。」

書簡 2. イザベラとパークスは英国、チェンバレンは日本

1881年11月15日 エディンバラ、ウォーカー・ストリート 12

「ハリー・パークス卿は素敵な銀の蓋付き懐中時計が入ったイトーに贈る箱を（私に断らないで）、あなたに任せたとのことです。あなたは彼〔イトー〕がそれを受け取ったかどうかご存知でしょうか。」

書簡 3. アーガイルシャー、トバモーリのイザベラから日本のチェンバレン宛て追伸部分

1883年9月12日

「追伸 私の召使いのイトーはまだあの仕事をしているのでしょうか？」

書簡 4. アーガイルシャー、トバモーリのイザベラから日本のチェンバレンへ

1888年10月3日

「朝鮮行の蒸気船はどのくらいの頻度で出発しますか、また日本のどの港から出ますか。例えばイトーと同じくらい英語を話せる通訳をソウルで雇えますか。（〔アーネスト〕サトウ氏は公使館からの信頼のおける朝鮮人なしでは私が朝鮮を旅行するのは不相当だと書いてきました）もしそのような人〔朝鮮人〕が通訳できないなら、日本人の通訳を雇えますでしょうか。」

上掲4通の書簡は以下のことを示している。書簡1では、イザベラ・バードはチェンバレンに、自分が7ヶ月前にハリー・パークスに預けた伊藤に贈る懐中時計の入った箱をハリー卿から受け取って、日本に持って行ってほしいと頼んでいて、少しでも早く伊藤に時計を渡したいと思っている。次の書簡2では、ハリー卿はあなた [チェンバレン] にその箱を渡したと言っている。彼女は伊藤がそれを受け取ったかどうか分からず、確実に彼の手に渡ることを切望している。3番目の書簡には時計に関しての記述はなく、ただ、伊藤はまだあの仕事 [通訳ガイド] をしているかと、尋ねている。3番目の書簡に時計の話がないことからおそらく受け取ったのではないかと推測できる。1882年に来日したウーグ・クラフト¹⁰⁾の著書の中の伊藤の写真(図1; 図7より部分拡大)をよく見るとチョッキのボタン辺りから腰にかけて白い紐のようなものが見えている。筆者はこれが彼女の贈った時計を身に着けた伊藤ではないかと推測していた¹¹⁾。書簡4は書簡3から5年が経っているが、彼女はイトーを忘れず彼の通訳ガイドとしての仕事への満足を証明するものである。



図1. 洋装のイトー

2. ヘンリー・ルーシー著 *West by East* (1885) で判明する懐中時計の所在

事実は、イザベラ・バードの贈り物である銀の蓋付懐中時計は伊藤に届いていた。しかしそれは失われてしまった。その顛末はヘンリー・ルーシーの1885年の旅行記 *West by East*¹²⁾ で明らかになる。イギリスの政治ジャーナリストのルーシーは1883年の議会の夏休み期間を利用して極東旅行をした。その旅行記に駆け出しの頃バードに仕えたイトーが彼の通訳として登場する。伊藤を通訳として雇ったルーシーは日本人でも珍しく、まして外国人ではほとんどとらない行程、すなわち横浜港から四日市港へ向かう汽船を利用

して横浜港から四日市港へ行き、そこから陸路京都へ行く道を選択した。その時彼はバードから贈られた懐中時計を携帯していた。横浜港を出たその夜、海は荒れていたが、船は真夜中の1時か2時頃に四日市港に着くとのことだった。実際そうだったが、ルーシーたちは船室に戻ってひと眠りし朝6時半頃に目覚め上陸した。伊藤は当然先に降りて、人力車の手配をしているはずだった。だが埠頭を探しても伊藤の姿が見えない。「イトーは何処」と彼らを案内する者が尋ねると、そこにいる人たちは指を下に向けて暗い海を指すだけだ。彼は溺れてしまったのか。とにかくルーシーたちは案内人と言われるがまま人力車に乗り埠頭近くの茶屋を探す。しかし、イトーは見つからない。人力車はさらに細い道を抜けて1マイル先の別の茶屋に止まった。そこで見たのは寄せ集めの借着をゴチャゴチャに着て歯をガチガチと音がするほど頭を震わせている消えたガイドだった。

ルーシーは、伊藤の話として、時計が失われたいきさつを「伊藤の話は単純だがスリル満点だった」とジャーナリストらしい書き出しで以下のように述べている。

「かの蒸気船は午前1時ころに停泊した。なんとか船を離れようと
タラップg a n g w a yに群がっている乗客を上陸させるため曳船が近づいてきていた。伊藤はいろいろな角度からこの状況をざっと見渡して、瞬時に最初の曳船は大勢が詰め込まれ過ぎて危険であると判断し、次の曳船サンパンを待った。それに16人全員ひっくるめて詰め込まれた。湾は前日の強風のなごりで大波がうねっていた。曳船の艦サンパンは舷門の下段の下に押しやられていた。暴風波が押し寄せ、風はピューピューと鋭い音を立て、一瞬の間に16人の乗客は水中でもがいていた。伊藤は船の下に落ち——『それから』と彼は付け加えた——『私はもう戻れないと思った』と。しかし彼は他の13人と同様に這い上がった。明るい月夜で周りには数隻の曳船サンパンがいたからだ。不幸なことに背中に赤ん坊を背負った女

性が沈んでしまい、ルーシーたちが村を離れる時まで彼女は見つかっていなかった。イトーは水に浸かっている間に予備のお金の入った財布を失くし、さらに悪いことにはバードと一緒に未踏路の縦断旅行をした記念に、彼に贈った銀の蓋付懐中時計を失ったのだらう¹³⁾。」

彼女が贈った時計は1881年か1882年に伊藤の手に渡り、1883年の夏までは、彼のガイド旅行に携行されていた。しかしこの時、時計は永遠に四日市港の水の下に沈んでしまった。時計は失われてしまったが、彼女が心より伊藤に感謝して贈った時計はとにかく彼の手に一度は渡り、彼の宝物となっていた。

というのは、このあと彼らは陸路京都へ向かったが、京都のある寺を訪ねた時のことだ。伊藤は言う——「もし私が先日、四日市湾で曳船サンベンが引っくり返った時に失くした懐中時計を取り戻したいと思ったら、私は21本の竹片を手に入れ、21度寺を回らなければならない。でも私はそんなことはしない¹⁴⁾」と断固たる口調で付け加えた。彼は取り戻せるものなら何度でも必要なだけ回っただろうが、彼は、それは虚しい迷信だと自分に言い聞かせている。しかしこの21本という数は願掛けする本人の年齢の数を表わし、伊藤が21という時彼の年齢を言っているのだから、ここに新たな年齢の問題が生じているが、年齢に関しては本稿Ⅱ-2で取り上げる。

また京都の西本願寺(書院)では、荒れ狂う海の障壁画[波濤図]で覆われ、天井は百を超える波が様々に渦巻く、画家(吉村孝敬、1769-1836)の本領が発揮された絵を目にした。この時イトーの姿を目にしたルーシーは、まだ四日市の海での自分に降りかかった経験を克服していない伊藤には恐ろしい光景だと述べている。

時計は四日市湾に沈んでしまった。しかし、バードが当時非常に高価であるだけでなく、日本では手に入れることの難しかった銀の蓋付懐中時計を伊藤に贈ったという事実は、若い伊藤が有能な通訳ガイドであったこと、そし

て彼女が深く感謝していたことを証明するものである。さらに前記書簡3では、「イトーはまだ‘あの仕事’をしているでしょうか」と問い、それから5年後の書簡4では、後の朝鮮・中国旅行を念頭に置いて、朝鮮でイトーのような通訳を雇いたい、場合によっては日本人通訳を可能ならイトーを雇いたいと思うほどに伊藤への信頼は深かった。

II. イザベラ・バードの通訳・伊藤鶴吉

1. 横浜の通訳伊藤鶴吉がイトーと判明

Ito (イトー) は、イザベラ・バードの伝記では「あのイトー」、シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore, 1856-1928)¹⁵⁾ の旅行記では 'Ito, made famous by Miss Bird' 「バード嬢によって有名になったイトー」 (*Ibid.*, p.145) と明記され、欧米旅行者たちの旅行記に Miss Bird の通訳という冠言葉付きで出てくる欧米読者にも周知の通訳ガイドである。通訳兼召使a servant interpreterのイトーが我々の前に横浜の通訳伊藤鶴吉として示されたのは、1976年6月で、平凡社から高梨健吉訳『日本奥地紀行』が出版された僅か3年後のことである。栃木の研究者武藤信義によって「通訳の伊藤鶴吉が…」¹⁶⁾ とフルネームで記された。その後2000年に金坂清則¹⁷⁾ によって伊藤の全容および写真が報告され、彼の旅・年齢・ガイド専門組合等幅広い検討がなされたのに加えて、これを踏まえて、若い日の伊藤の写真同定およびマリーズ¹⁸⁾、ウーグ・クラフトとのガイド旅行が検討され¹⁹⁾、バードの旅行記の中に生き生きと描かれた「イトー」は現実味をもった人物として姿を現し始めた。

2. 伊藤鶴吉の年齢に関する考察

伊藤は安政4年12月17日神奈川県三浦郡菊名村 (現 神奈川県三浦市) に生まれた²⁰⁾。安政4年12月17日はグリゴリオ暦1858年1月31日である。この年を跨ぐ生まれ月の違いに加えて、明治5年末の新暦への変更が伊

藤の年齢のいくつかの不可解な記述を生み出す。1858 [安政4] 年の誕生から西暦を用いて計算すると伊藤がバードと出会った1878 [明治11] 年春には誕生日が過ぎているので満20歳となる。当時日本人が用いていた数え年では21歳である。しかし、なぜか彼女の通訳としての面接時の記述では、「彼は、年はただの十八だったが、これは私たちの二十三か二十四に相当する。'He is only **eighteen**, but this is equivalent to **twenty-three or twenty-four** with us.'²¹⁾とあり、18歳と言ったようなのである。これに対し、彼女は、これは英国の23、4歳に相当すると付け加えている。伊藤には年齢を少なく言うメリットはないと考えられ、西洋風の満年齢にしようとして間違ったと思われる。さらに奇妙なことに、この旅行から5年後の1883年のヘンリー・ルーシーの旅行記ではイトーは自分の年齢を21歳と言っている。この時彼の年齢は満25歳になっているのだが、^{E n g l i s h r e c k o n i n g}イギリス式に数えると、と付け加えながら繰り返し21歳と言っているのは伊藤自身に何か計算上の間違いが起きているとしか思えない。伊藤は1913 [大正2] 年1月6日に亡くなった。その1913年1月の訃報記事、萬新報 (1月9日、図12) では享年55歳と書かれているが、*The Japan Weekly Mail* 『ジャパン・ウィークリー・メイル』 (1月11日、図14)、*The Japan Gazette* 『ジャパン・ガゼット』 (1月7日)、横浜貿易新報 (1月9日) では57歳となっている。誕生日を新暦1858年1月31日とすると、新暦1月6日の死去は誕生日前なので満54歳、数え年で56歳となるはずである。表1に示す各記述における年齢及び実年齢の違いはどこに起因するのであろうか。考えられるのは新暦発足の年月日と伊藤の誕生日の関係である。前述のように彼の誕生日は安政4年12月17日なのでグリゴリオ暦では1858年1月31日となり、年を跨ぎ月日も異なる。日本における太陽暦の採用は1872 [明治5年] 11月9日の「改暦の布告」による。これにより旧暦明治5年12月2日 [1872年12月31日] の翌日を新暦明治6年1月1日 [1873年1月1日] として太陽暦が採用された。鶴吉の生年月日は12月3日から12月30日の間にあり、彼自身

が自分の誕生日を12月17日と考えていたか1月31日と考えていたかにより認識が変わる。正月を迎えて歳を重ねる当時の習慣では、そもそも誕生日そのものが重要でなかった。ただ伊藤の場合は本人が年の瀬に生まれたとと思っていたことは考えられる。つまり新暦換算の1858年1月31日ではなく、1858年12月17日とっていた可能性がある。新暦採用時、鶴吉は満14歳であるが、生まれて1歳で正月毎に歳を加える日本式の「数え年」では明治6年正月1日は15回目の正月を数えて16歳となる。新暦が採用された時点で旧来の日本式数え方とは2歳の違いが出る。欧米人に接していた彼自身このことを知っていたと考えられ、西洋人には日本式の年齢から2歳を引いて申告したと考えられる。また、師走17日生まれの彼が西暦では1月31日の生まれと認識できたかどうかは分からない。伊藤が安政4年全部を1858年と思い込んで自分の誕生日は1858年12月17日として計算すると1878年に西洋式数え方では19歳、さらに1歳引いて18歳と申告してもおかしくない²²⁾。彼のガイドを受けた西洋人たちは彼の申告年齢と彼の案内及び落ち着いた態度に関して、何か述べざるを得ないほどの違和感をもっているのである。バードは「私たちの23、4歳」といい、4歳も年齢を間違えて申告されたルーシーは以下のように述べている。

「彼は英国式の^{reckoning}数え方で21歳だが、新知識を求める弛まぬ研鑽によって彼を40歳に見せている。彼は、日本式の年齢の数え方では、生まれた年の元旦から歳を重ねる。1月であれ、真夏であれ、12月31日であれ、生まれた時が1歳だ。」

‘and, according to English reckoning, is twenty-one years old, though habits of reflection and constant searching after fresh knowledge made him look forty. In mentioning his age, with the proviso that it was “according to English way of reckoning,” he explained that according to Japanese custom age is counted from

the first day of January succeeding birth. At last date a child is one year old, whether born the previous January, at Midsummer, or on the 31st of December. (pp.243-4)'

伊藤は「ルーシーに」上記のように説明した。つまり、彼は満年齢で数える西洋式に比べて、誕生日前では2歳、誕生日後では1歳年が多くなることを知っていた。上記の事情から伊藤の雇用主の記した年齢の間違ひは伊藤自身の何とか西洋人のように年齢を数えようとする努力の結果としか言いようがない。表1に示すように伊藤の申告年齢と実際の満年齢には1～4歳の差が認められるのである。

表1. 伊藤鶴吉の実年齢と記述された年齢

事項	年月日	満年齢	数え年	旅行記等記載年齢
誕生日	1858年1月31日	0歳	1歳	
新暦採用時	1873年1月1日	14歳	16歳	
バード面接時 ²³⁾	1878年 春	20歳	21歳	18歳
外務省旅券発給時 ²⁴⁾	1878年	20歳	21歳	20歳10ヶ月
ルーシー旅行時 ²⁵⁾	1883年 秋	25歳	26歳	21歳
伊藤訃報記事享年	1913年1月6日	54歳	56歳	55、57歳

外務省外交史料館の旅券台帳(図5)に記載されている「20歳10ヶ月」は生年月日の1858年1月31日からみて、20歳10ヶ月で年齢は一致する。図5右下端の「明治十二年七月一日」は旅券返還完了日。

3. 故郷三浦半島の菊名から横浜への転居と通訳ガイド以前

伊藤は神奈川県三浦半島の菊名村で、1858年1月31日〔安政4年12月17日〕に生まれた。菊名は海に張り付くように家々が並び、そこから緩い丘陵へと上っていく半農半漁の小村である。目の海を観音崎燈台方向に迎

ると浦賀水道に出、久里浜の入り江が見える。1853年7月〔嘉永6年6月〕にアメリカ海軍提督ペリー率いる艦船4隻が浦賀沖に現れ、幕府はペリー一行の久里浜への上陸を認めた。この半島で漁をする村民たちは黒船を目にした最初の日本人だったろう。黒船来航はあつという間に菊名の村に伝わったことは間違いない。ペリー来航から5年後の1858年7月29日〔安政5年6月19日〕日米修好通商条約が締結され日本は開港へと舵を切った。この日から3ヶ月に満たない期間にオランダ、ロシア、イギリス、フランスと次々修好通商条約が締結された。翌1859年7月1日をもって神奈川、長崎、函館が開港された。伊藤は条約締結した1858年に生まれたのである。寒村であった久良岐郡横浜村は、1860年に横浜町となった。伊藤の一家²⁶⁾は、関内居留地の成立と共に発展する横浜町に移住した。何歳の時かは判明していないが、新暦採用の明治6年頃には横浜に転居していたと考えられる。学制発布時の1872〔明治5〕年には、既に伊藤は数えて学制の適用年齢の15歳を過ぎており学校には通わなかった。彼は開港で賑わう街で、駐屯している英国軍や英米人の下働きをしながら独学で英語を身につけた。彼の訃報記事中に「日本一の通弁 横浜グランド・ホテルの接客係大石貞吉氏は語って曰く、伊藤君は横浜開港当時英国の守備兵なる赤隊の将校のボーイを為して実地に英語を研究したる人にして、学校教育は受け居らぬも、博学多識²⁷⁾」とある。1883年に伊藤を伴って旅行したルーシーも「彼のまだ若い人生の中に詰め込まれている経験の中にはイギリスの軍艦での短い滞在があった。」²⁸⁾と駐屯軍将校のボーイをしていた時代に言及している。

外国人の安全確保のため横浜居留地防衛権を獲得した英仏両軍は、1863-1875.3〔文久3-明治8〕年の12年間に亘って、現在の「港の見える丘公園」の見晴台を中心に海に向かい左にフランス軍、右側にイギリス軍が駐屯していた。イギリス軍は多い時で約1500人、撤退時には約280人だった²⁹⁾。伊藤は10代前半より駐屯地で走り使いのような仕事から始め、将校付きボーイとなったが、1875〔明治8〕年に英仏両駐屯軍は撤退した。また、

バードは、伊藤は面接時に「米国公使館に^{had lived at} [住込みで] いたことがあり、大阪鉄道で事務員をやった³⁰⁾」と言ったと記し、彼は通訳ガイドとして出発する前に、西洋人の所でいくつかの仕事を経験していて、「ハリー・パークス夫妻と会うと深々と頭を下げる。明らかに彼は、公使館がわが家であるかのように慣れている。」と言うように、パークスの身分を分かっている伊藤の所作から何らかの形で英国公使館に出入りしていたと確信したようだ。

4. 通訳ガイドとしての初期 10 年の履歴

伊藤が通訳業を始めたのは 1877 [明治 10] 年である。先述の報知新聞の訃報記事の前段には「約四十年間従業」とあり、また「通弁の元勲逝く」の見出しを付けた『萬新報』(図 12)には「明治十年より通訳業に従事し…」(本稿Ⅳ-2)とあるが、表 2 に示したチャールズ・マリーズとの採集旅行と合っている。彼が通訳業を開始した 1877 年以降の大きな通訳旅行は西洋人の旅行記中に表れ、通訳として有名になってからは、新聞記事の中に伊藤の姿を見ることができる。表 2 に通訳ガイド業開始以降の伊藤の長期旅行の雇用者、旅行地域、日程を示す。

表 2. 伊藤の通訳旅行

	年 月	国籍 雇用者 職業	旅行地・経路・著作物
1	1877.6-10 1878.9-12 (北海道・東北) ? -1879.6 (大陸) 夏 -12 ?	英 チャールズ・マリーズ 植物採集家	日光、東北 (奥州街道)、北海道 新潟 - (陸路) - 横浜 <i>Hortus Veitchii</i> 『プラントハンター』(注 29 参照)
2	1878.6-9	英 イザベラ・バード レディ・トラベラー	日光、新潟、東北 (羽州街道)、 北海道 『日本奥地紀行』(注 1 参照)
3	1880.2-1881.11	英 ジョージ・ルイス 昆虫採集家	北海道-九州霧島 中山道、関東、東北

4	1882.8-1883.1	仏 ウーグ・クラフト	東海道、中山道、日光、京都、奈良 『ボンジュール ジャポン』(注 39 参照)
5	1883 夏	英 ヘンリー・ルーシー 政治ジャーナリスト	横浜-汽船-四日市-陸路-京都 <i>East By West</i>
6	1884-1890 (時期不明)	米 エリザ・シドモア 地理学者、写真家	日光 『シドモア日本紀行』(注 13 参照)
新聞記事：アメリカ鉄道王ハリマン (1905)、アメリカ太平洋汽船会社長シユウエリン、 インド イワヤール殿下、インド バロダ王殿下			

表 2 から通訳ガイド業開始以降、毎年長期旅行ではほぼ埋まっているのが分かる。通訳ガイドとしての初期旅行の成功は、伊藤を外国の王族やアメリカの鉄道王など国賓級の通訳も務める通訳の第一人者へと導いた。

表 2 の 4 のウーグ・クラフトの旅行記『ボンジュール ジャポン』³¹⁾には伊藤の入った写真が 3 枚掲載されている。同書のイトーがバードの通訳イトーであるとの記述が全くないが、掲載されたイトーの写真 (図 3) から金坂清則は「年齢と写真の符号、顔立ちの類似性とがしりした身体つき」が彼女の記述に類似しているとしてイトーと断定できるとした。金坂 (2000) の発表を受けて、筆者は長い間『プラントハンター』の中の「日本の植木屋でのマリーズ」(図 4) に丁髷の日本人に交じって一人だけ洋髪で写っている少年がイトーではないかと疑っていたが確証はなかった。そこで両者の写真を切り取り拡大照合してみた。図 2 (図 4 より拡大) はマリーズの通訳時で、バードの通訳をした 1 年前 (1877) の 19 歳の頃である。図 3 (図 7 より拡大) はクラフトが写した 24 歳の頃である。明ら



図 2. 伊藤 1877 年
(注) 図 4. 部分拡大



図 3. 伊藤 1882 年
(注) 図 7. 部分拡大

かに両者は同一人物であり、クラフトの通訳は金坂の指摘通りバードの通訳伊藤であり、またマリーズと写っている少年もまた彼女と旅行に出る直前の若い伊藤だと同定できた³²⁾。



図4. 日本の植木屋でのマリーズと伊藤鶴吉
1887年

イトー左端、マリーズ右から4人目。

出典：白幡洋三郎著『プラントハンター』講談社 1994

Ⅲ. 伊藤鶴吉の初期通訳ガイド旅行

1-a. プラントハンター マリーズの通訳兼従者兼助手として

前述のバードの面接時に、伊藤は「東のコースを通過して北部日本を旅行し、北海道では植物収集家のマリーズ氏のお伴をしたという。」³³⁾ と言っている。マリーズはイギリスの植物学者で植物ハンターのチャールズ・マリーズである。彼はヴィーチ商会 (Veitch and Sons) のプラントハンターとして1877 [明治10] 年4月20日に長崎に上陸した。マリーズは長崎から瀬戸内海経由で大阪・京都を経て横浜に到着、当地で月給7円の契約で伊藤を採用して、横浜の植木屋を訪問したのち、5月には横浜を発ち日光から奥州街道を進み青森の八甲田山で針葉樹の種の採取をして、函館港に6月20日に着いている³⁴⁾。八甲田山で学名に *Abies mariesii* と彼の名の残るオオシラビソ (アオモリトドマツ)³⁵⁾ を採取しているが、この時、木によじ登って採取した少年 (boy)³⁶⁾ とだけ記されたのが伊藤である。2人は6～10月を北海道の山々で植物採集と昆虫収集をした後、船で新潟に行き日本海側の採集を終え、12月に陸路で横浜に戻った。横浜を出発した5月から横浜に戻った12月までの8ヶ月に亘るこのマリーズとの植物採集旅行が伊藤の本

格的通訳ガイド業の始まりとなった。

日本北東部の旅行から戻ったマリーズは1877年12月25日に横浜を立ち、台湾、香港、中国で植物採集を続けたが、この時、伊藤は同行しなかった。翌1878年夏に中国から一時日本に戻ったマリーズは再び伊藤を雇おうとしたが、伊藤はバードの通訳兼従者として北海道を目指す旅行に出発してしまっていたからである。

1-b. チャールズ・マリーズおよびイザベラ・バードと交わした伊藤の契約と日程

3ヶ月にわたる日光・日本海側街道を通して目的地北海道への旅行を計画したバードは、横浜で通訳兼召使いを雇うための面接をした。彼女は当初からガイドというより、彼女の身の回りのことや様々な用事を足してくれる通訳兼召使いを雇うつもりだった。北への旅行開始を急ぐ彼女は、推薦状はないが³⁷⁾、東北・北海道旅行経験があり、植物の乾燥法を知っていて少しの料理と英語も書けるというイトーを雇うことにした。彼女は——「彼は私の英語を理解し、私には彼の英語が分かった³⁸⁾」と述べ、これが伊藤採用の決定打であった。雇用が決定すると「まもなく彼は契約書を持って戻って来た。その書類には、約束の給料に対して神仏に誓って必ず忠実に仕える、と書いてあった。彼はそれに印を押し、私は署名した。」³⁹⁾とあるように伊藤は、西洋式の契約概念を理解し、契約に基づき互いに雇用契約書に捺印・サインをしている。伊藤の雇用は正式な書面をもって行われたのだ。その翌日、伊藤は一ヶ月の給料の前払いを要求し、それを受け取った彼は、最初の3日間の準備を整えて、彼女の前に現れる手際の良さを見せて、2人は日本海側のルートで北海道を目指した。旅は順調に進み、8月12日までには北海道函館に到着していた。ここでバードはヘボン夫妻に出会い、伊藤の前の雇用者であるマリーズとのいきさつを知る。中国で植物採集をしていたマリーズは前年伊藤と採集した植物の種が海難でだめになったので、1878年

夏に日本に戻り再採集——特に針葉樹の種を——するため、再び北海道へ渡っていた⁴⁰⁾。

函館でマリーズと出会ったバードは、伊藤が彼と「月給7円で氏の要求する期間だけ勤める」という契約を結んでいたことを知る。伊藤はそれを破って彼女と月給12ドルで契約を結んだのだ。ただマリーズとの契約では彼が「要求する期間だけ」という契約が一連の旅行の期間を指すのか、あるいは雇用者の他国旅行期間、あるいは他の行動中の待機期間も含むものだったのか曖昧である。実際バードが伊藤を採用した6月上旬はマリーズが大陸で植物採集していた期間で日本にはいなかった。マリーズが伊藤を同伴した日光-北海道-海路新潟-陸路横浜の旅から戻ったのは12月である。クリスマスには香港経由で台湾に向けて出発している。伊藤にはクリスマスから、マリーズが戻る夏まで待機義務のある契約だったということであろうか。契約の詳細は分かっていない。

バードは函館(34信)冒頭でイトーの芳しくない行い(unpleasant *éclaircissement*)があったと敢えてフランス語の単語を用いて述べている。横浜で推薦状がなかったにもかかわらずイトーと契約を結んだあとで彼女とパークス夫人に、彼は前の雇主であるマリーズが彼に戻って来てくれと頼んだが、彼は「ある婦人と契約を結んだ」(Mr. Maries, asked him to go back to him, to which he had replied that he had "a contract with a lady.")と言って断ったといったことを彼女は思い出した。マリーズは実際ここ函館にいる。伊藤がマリーズに断りを入れたのはバードとの契約後、しかも非常に短期間のことになる。しかし彼女との契約を交わした6月にはマリーズは大陸に渡っていて、伊藤に直接話すことは出来ないはずである。マリーズは1878年夏に日本に戻ることを考えて、伊藤に手紙か電報を送っていたのだろうか。疑問として残る点であるが、函館でマリーズから事情を聞いた彼女は、彼が伊藤を必要とする理由を次のよう記している——

「マリーズ氏は、この背信行為によって非常な迷惑を受け、彼の植物採集の

完成に多大の不便を感じている。というのは、伊藤は大変器用で、氏が草花をうまく乾燥させる方法を教え込んだばかりでなく、種子の採集に二日も三日も出かけることを委せられるほどになっていたからである。」(第34信、函館にて) 領事館でマリーズと会った彼女は北海道旅行が終わったら、伊藤をその正當な主人に返すことに手はずを決めた。そうしたら氏は、彼を一年半ぐらい中国や台湾につれて行くつもりだという。バードにとっても伊藤はこの先の旅行に必要であり手放せなかった。それでも彼女はこのマリーズとの約束を守るつもりだった。蝦夷地の旅も紋別まで来て終わりに近づいていた。ここで彼女は海岸線を通る道から噴火湾沿いの道に全面的に計画変更をする。理由は川が氾濫して日程が遅れ、「定めた日にマリーズ氏に伊藤を手渡すという約束を破るといふ危険があることが分かったからである。」⁴¹⁾と彼女は言う。さらに9月14日、「今日は私の北海道における最後の日である」で始まる第42信で、伊藤との別れを記す。「彼がいないと、もうすでに私は困ってしまっている。彼の利口さには驚くべきものがある。彼は男らしい立派な主人 (good manly master) のところへ行く。」と述べている。この日彼女は函館に来ていたヘボン夫妻と一緒に船に乗って横浜に向かう。伊藤は乗っていない。つまり、伊藤はマリーズの下に残り、植物採集の助手を務めたのだ。マリーズは1878年11月9日のGleneagles号で横浜港を発ち⁴²⁾、12月に長江河畔の漢口に行き、そこから宜昌へと向かい植物採集をしたが、彼がバードに言ったように、この旅行に伊藤を連れて行ったとすると、1878年秋から1879年末までの彼のガイドの仕事が埋まるが、これを示す明確な記録がない。マリーズの乗船した船(1878年11月9日Glenartney号)に「Ito」の名前はないがステアリングに10名の日本人の記載があり、伊藤がこの中にいた可能性は否定できない。

しかし、Veitchiiには、次のように記されている。「現地の人を連れての採集では、マリーズは日本人を伴っての採集旅行のようにうまくいかなかったのは、その男はがさつでその上臆病で、ときたま荷物を盗まれる。

1879年の夏にマリーズは日本へ帰った。」‘with the natives of China Maries did not succeed so well as with the Japanese, he was not sufficiently gentle, and was often threatened’ threatened and occasionally robbed of his baggage ; in the summer of 1879 he returned to Japan.⁴³⁾ この日本人は伊藤である。それに対して現地人 (natives) を雇ったが役に立たなかった、と云っている。この記述から伊藤はついて行かなかったと考えられる。マリーズは中国での採集を終えて1879年夏に日本に戻り採集を続けた。三度目の植物採集の成果として多くのブナの種を集め、また美しい竹を見つけ、彼は1879年11月5日に横浜を出港⁴⁴⁾ し神戸経由で、1880年2月にイギリスに帰国している。これらを記した *Hortus Veitchii*⁴⁵⁾ には伊藤を示す記事は上述の英文1行だけで、3度目の日本の採集に伊藤を伴ったかは確認できていないが、日本語の話せない彼には通訳兼助手が必要である。この再々採集旅行の成功は伊藤が同伴したのではないかと考えられる。

また、本稿では *Hortus Veitchii* の記述から金坂 (2000) と同様に中国・台湾旅行にはついて行かなかったとする。しかし、上田卓爾⁴⁶⁾ (2013) は伊藤に対して1878年11月に旅券が発行された後の12月 (実際は11月5日) にマリーズが中国へ向かっていること、マリーズの日本再来日の1879年夏に伊藤の旅券が返還されていることから伊藤はマリーズに同伴して中国へ行ったとの説を取っていて、伊藤の旅券⁴⁷⁾ (図5) の返還記録には1879年7月1日付、旅行目的は「雇人回周」(旅行) となっており、上田の説に矛盾はない。しかし、*The Japan Weekly Mail* の横浜出入港乗客名簿の資料から、一旦函館でバードと別れた伊藤は再びバードに雇われたのではないかと考えられる。1878年12月5日の広島丸の横浜入港乗客名簿に Miss Bird, Mr. E. M. Satow, Ito の名前がある。Ito

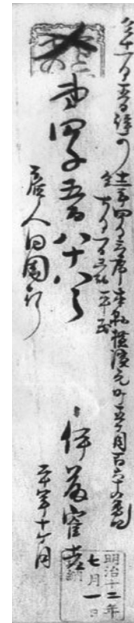


図5. 伊藤旅券台帳より

という名前は余りに一般的で伊藤鶴吉と断定できないが3人の名前が揃うのは偶然にしても見逃すことはできない。バードは10月16日（上海郵便汽船広島丸で神戸へ出航）から12月5日まで関西旅行をしており、これは神戸→横浜の帰港を示す。では、伊藤はいつ神戸に向かったかというとな11月28日の九重丸である。当時横浜－神戸は4日かかるので、伊藤の在神戸期間は短い、当時伊藤には通訳ガイド協会設立の意図があり⁴⁸⁾、神戸に行く用事があり、同時にバードと日程を合わせたと考えられる。また彼女自身が日本に別れを告げたと旅行記に書いている1878年12月19日の*Volga*号にMiss Birdの名前がある。一方、伊藤は18日に上海便（神戸、香港寄港）名古屋丸に乗船し、寄港地で彼の雇主（バード）のために働いた可能性が出てきた。これが伊藤鶴吉とすると1878年11月9日に中国に向けて出港しているマリーズとの旅行は不可能になる。また、伊藤は1879年3月30日に名古屋丸で横浜に入港しており、これが神戸あるいは上海からの帰港か判定は難しく、マリーズと中国旅行に行ったのかあるいは離日まで断続的にバードに仕えたのか現段階では断定は難しいが、同時にそうであった可能性も排除できない。

マリーズの日程をまとめるとつぎのようになる。

マリーズの採集日程（1877-1879、日本・中国・台湾）

マリーズの行程は*Hortus Veitchii* (James H. Veitchii, 1906) による。出入国日付同定は*The Japan Weekly Mail*の横浜出入港の乗客名簿による。

* 下線；二重実線－伊藤同行、破線－同行を断定できず。

英国（1877年2月1日発）－香港・寧波・台湾⇒長崎（4月20日）－
大阪・京都
⇒横浜 [伊藤同行] ⇒奥州街道－青森⇒北海道（函館着6月20日） 函

館発 (10月) ^{海路}⇒新潟 - 日本海側の採集旅行 - 新潟発 (12月) ^{陸路}⇒
 横浜 - 横浜発 (11月9日) ⇒香港 (1878年1月2～16日) - 中国採集
 旅行⇒日本 (1878年夏着～秋 [9月14日伊藤合流] ～11月) 横浜発
 (1878年11月9日) ⇒長江流域 (12月～1879年春) ⇒日本着 (1879
 年夏) ⇒離日 (1879年11月5日) ⇒ロンドン着

実際若き伊藤はマリーズが手放せないくらい有能な青年であった。伊藤を伴っての日本の東北・北海道の旅行がバードに日本の旅行記の成功をもたらしたように、マリーズもまた伊藤を伴っての青森・北海道のプラントハンティングで成功を取っていた。伊藤にとっては、1877年と1878年の2度の長期間旅行は通訳ガイドの経験と実績をつむ幸運なスタートとなり、雇用者・被雇用者の双方に大きな成功をもたらす結果となった。

2. 昆虫採集家 ジョージ・ルイスの通訳として

アーサー・クロウ⁴⁹⁾の *Highways in Japan* 『日本内陸紀行』の京都における記述にバードの通訳イトーが登場する。ロンドンの [昆虫採集家である] ルイス夫妻⁵⁰⁾は、「北海道で数ヶ月間進めていた採集を京都近郊でやり通すために、バード嬢と奥地を一緒に歩いたイトーという名の通訳を伴って今夜到着した」Mr. and Mrs. L., of London, arrived this evening, the former to continue, near Kioto, his collection of insects, which he has been prosecuting for some months in Yezo. They have an interpreter named Ito, who accompanied Miss Bird through the country.⁵¹⁾と述べている。ルイスは、1880年2月27日から1881年11月3日まで、日本に滞在して昆虫採集をしていた。クロウは、伊藤を伴って7月2日から7月4日にかけて京都採集旅行中だったルイス夫妻と出会った。ルイスにとっては、これが2回目の来日である。1回目は1867年から1872年にかけてである⁵²⁾。この2回目の来日時にルイスの採集コースに伊藤が同行していた。ルイスの日本にお

ける採集コースは3コース（図6）に分けられる。

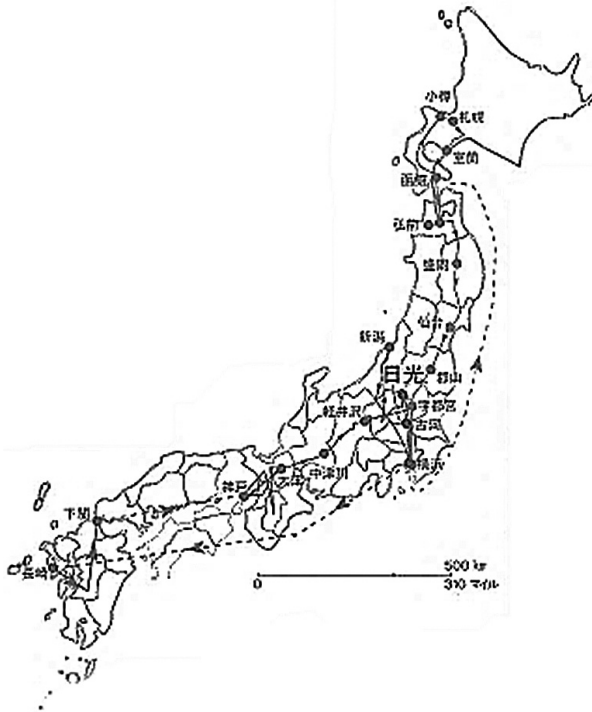


図6. 1880-1881年ルイスの昆虫採集行程
栃木県立博物館パンフレット(2018)より転載
提供・製作者 栗原隆・星直斗

第1回は1880年5月27日から6月23日にかけて横浜・東京近辺、6月2日に古河、3日から21日まで日光、23日に横浜に帰った。第2回は7月5日に横浜を出航、6日に函館に着いて道内で採集旅行ののち8月29日に函館を出航、8月30日に青森に着いて陸路横浜へ戻るコースである。第3回

は1881年2月9日横浜を出航して10日から4月21日まで長崎、4月21日から熊本県湯山を目的地とする熊本・長崎間往復同コースで5月22日長崎へ戻り、6月3日に長崎を発ち下関から瀬戸内航路で9日に神戸着、陸路、京都・奈良・大阪・神戸・大津から中山道を歩き妻籠・軽井沢・碓氷峠を通過して松井田から例幣使街道を通過して日光へ、そこで半月を過ごしたのち日本海に向かい新潟へ。帰路は新潟・群馬の県境の三国峠を越えて東京・横浜に戻った。1881年2月9日から8ヶ月間近くにわたる伊藤にとってこれまで経験したことのない長期旅行ただただでなく、大変な過密スケジュールで、1週間以上の滞在は日光、札幌、新潟のみである⁵³⁾。(図6・行程表を参照されたい)。クロウが伊藤を連れだしたルイスと会ったのはこの第3コースの旅行中のことである。植物採集家のマリーズに続いて昆虫採集家のルイスの通訳はマリーズの場合と同様に助手の役目も果たしたと考えられる。ルイスの場合複数の採集助手を雇い同行していたが、それでも伊藤はガイドとしての初期に植物や昆虫学の専門的知識及び技術を身につけるチャンスがあり、その後の動植物に関する説明に大いに役立ったに違いない。

表3. ルイスの日本昆虫採集旅行日程

※ 1880-1881年ルイスの昆虫採集行程(栗原隆・星直斗)より筆者作成

第1回 旅行

1880/5/27 ~ 5/31	横浜
6/1	東京
6/2	古河
6/3 ~ 6/21	日光
6/22	野渡(野木町)
6/23	横浜

第2回 旅行

1880/7/5 横浜
 7/6 ~ 7/8 北海道
 7/9 函館
 7/13 ~ 7/17 七飯
 じゅんさい沼
 7/18 ~ 7/27 函館
 7/28 ~ 7/30 七飯
 じゅんさい沼
 7/31 ~ 8/2 函館
 8/3 ~ 8/4 小樽
 8/5 ~ 8/16 札幌
 8/17 美々
 8/18 白老
 8/19 ~ 8/20 幌別
 8/21 室蘭
 8/22 森町
 8/23 ~ 8/29 函館
 8/30 青森
 8/31 ~ 9/2 弘前
 8/31 ~ 9/9 青森
 9/10 ~ 9/19 函館
 9/19 ~ 10/10 青森
 10/11 七戸
 10/12 ~ 10/13 三戸
 10/14 一戸 盛岡
 10/16 花巻 水沢
 10/18 金成 古川
 10/20 ~ 10/22 仙台
 10/23 藤田 10/24 福島
 10/25 郡山 10/26 白河
 10/27 越堀 10/28 矢板
 10/29 ~ 10/31 日光
 11/1 宇都宮
 11/2 東京 11/3 横浜

第3回 旅行

1881/2/9 横浜
 2/10 ~ 4/21 長崎
 4/22 熊本 (肥後)
 4/23 ~ 4/26 熊本 (五ヶ寺)
 4/27 ~ 4/28 八代
 4/29 神瀬
 4/30 ~ 5/2 一勝地池の下
 5/3 ~ 5/8 人吉 5/9 黒肥寺
 5/10 ~ 5/14 湯山
 5/15 ~ 5/17 人吉
 5/18 神瀬 5/19 八代
 5/20 ~ 5/21 熊本
 5/22 ~ 6/3 長崎
 6/4 ~ 6/9 神戸 (下関) から
 6/10 ~ 6/12 京都
 6/13 ~ 7/2 奈良周辺
 7/2 ~ 7/4 京都 7/5 大津
 7/6 ~ 7/8 大阪
 7/9 ~ 7/19 神戸
 7/20 大津 7/21 新加納
 7/22 細久手 7/23 中津川
 7/24 妻籠 7/25 上松
 7/26 ~ 7/29 福島
 7/30 洗馬 7/31 下諏訪
 8/1 和田峠 8/2 望月
 8/3 追分
 8/4 ~ 8/6 碓氷峠 8/7 松井田
 8/8 福居 8/9 楡木
 8/10 ~ 8/25 日光
 8/26 足尾 8/27 大間々
 8/28 前橋 8/29 沼田
 8/30 武能 8/31 清水峠
 9/1 六日町 9/2 長岡
 9/3 三条
 9/4 ~ 9/16 新潟
 9/17 長岡 9/18 堀之内
 9/19 浦佐
 9/20 ~ 9/21 二居
 9/22 三国峠 9/23 渋川 9/24 熊谷
 9/25 ~ 9/27 東京
 9/28 横浜

3. フランス人青年 ウーグ・クラフトの通訳ガイドとして

1882年8月から1883年1月にかけて東海道・中山道と日光を旅したウーグ・クラフトの旅行記の日本部分邦訳：『ボンジュール ジャポン』⁵⁴⁾には副題に「フランス青年が活写した1882年」とあるように、150枚以上の写真が掲載されていて、当時の日本人の姿（様々な職業・男・女・子供）・家屋・風景が写っている。ページを開くと出発前の一行の写真（図7）が載っている。

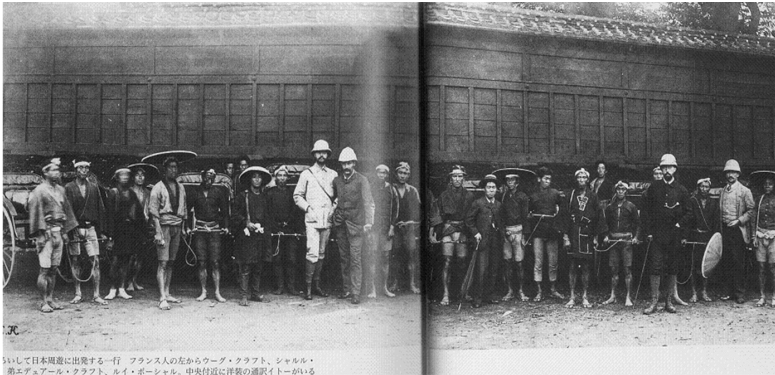


図7. ウーグ・クラフトの通訳として右中央付近帽子をかぶり、傘を持っている伊藤
出所：ウーグ・クラフト、後藤和雄編『ボンジュール ジャポン』朝日新聞社1998, p.1

30人近い日本人の車引その他雇人たちのほぼ中央に一人三つ揃いを身に
着け、頭にハット、手に洋傘を持った男が立っている。「洋装の通訳イトー」
と編者が説明を付けている。この本の中に「イトー、私たちの小柄なガイド」
‘Ito, notre petit guide’⁵⁵⁾のような表現で通訳のイトーは幾度となく登
場する。クラフトは伊藤の洋服姿を「これまで、完全にヨーロッパ風の洋服
を着ている日本人をあまり見かけていない。洋装はほとんどが政府の役人
か、公職についている人たちだ。通訳のイトー [我々の若いイトー、Notre
jeune Ito] は最新のエレガントな三つ揃いを着て私たちのお供をしてい
る⁵⁶⁾。」と云う。また、イトーの具体的な仕事を示されている。当時の通訳

兼従者が、人力車や宿の手配から支払い、芸者の手配と言った現代の旅行エージェントに当たる仕事から、料理と食事の準備までこなしていたことが分かる。料理は通訳ガイドにとって重要な仕事であったようで、次に出てくるヘンリー・ルーシーも、「イトーは素晴らしいオムレツを作りそれにはタンの冷製料理とココアが添えられていて、完璧に贅沢な昼食だった。」 Ito made an excellent omelette, which, with a dish of cold tongue and a cup of cocoa, completed a luxurious luncheon. とイトーの手料理^{cooking}について記している。またシドモアも階段を上り下りして運ぶ女中たちに手伝わせながらテーブルセッティングをするイトーを‘Our guide cooked all our food’ と記している⁵⁷⁾ が、この中には西洋人の嗜好に合う伊藤の手料理が含まれている⁵⁸⁾。クラフトは、イトーを a servant interpreter^{サーバント 通訳} とは呼ばない。彼は‘guide’だ。というのは、クラフトらの旅は「ジンリキシャ十四台に各二人の車夫がついていて、それにイトーを加えると、なんと三十二人の男の一団である」⁵⁹⁾、というほどの大キャラバンだったからである。図7で分かるように、この内4人はクラフトの弟ら外国人であるが、伊藤が手配した大勢の車夫や雇い人がいて、伊藤は下働きのな仕事をする必要がなかった。しかし旅行中の西洋人の口に合う食事の準備は伊藤にしか出来ない仕事だった。伊藤の特別な仕事は以下のように実にきめ細かく多岐にわたる。

「イトーが慣れた手つきで和洋折衷の食事を準備している間に、私たちは柔らかな畳の上でくつろぎ、洋服を脱ぎ捨てて唐草模様の着物を羽織り、青か白のタビ〔二股に分かれている靴下で、片方に親指を、もう片方に四本の指を入れる〕を履く⁶⁰⁾。」伊藤は落ち着いた面持ちで礼儀正しく正座して後ろに控えている(図8)。



図8. 左上正座している伊藤 1882年
出所: 同上

「イトーが周りにキーチングスの虫よけパウダーを振りまくが、これが結構必要で、女中さんが部屋の四隅に赤の縁取りのあるグリーンネットを吊るす」「宿の主人の書いたきれいな漢字の勘定書きによりイトーが支払い、出発際、女中さんに白い紙に包んだチップをそっと渡す」「他の重要な場所と同様、イトーはすぐに私たちのパスポートを提示しなくてはならない」⁶¹⁾。芝居見物では「この歴史物語の細かいところはイトーに聞いたが、芝居自体が非常によく演じられていたので十分理解できた (p.31)」。

「大阪では名古屋や京都でそうしたように、イトーに歌手——ゲイシャ(芸者) つきの晚餐の手配をまかせた (p.37)」。伊藤がスマートにこなしているこれらの仕事は、バードとの旅行でもこれらはほとんど伊藤の仕事だったが、その書かれ方は幾分ぎこちなく、幾分偏見も含まれている。イトーはもはや ^{サーバント}servant ではない ^{ガイド}通訳案内士だ。その役割は、乗り物の手配をし、必要な人夫を雇い、芸者や、ホテルの手配をする現在の通訳ツアーコンダクター兼旅行エージェントに近いものだった。チップを渡すのも伊藤の役割だった。すなわち、バードが前述の手紙で云った「何でも屋の伊藤」^{factotum}だった。

4. ジャーナリスト ヘンリー・ルーシー (Henry William Lucy, 1842-1924) の通訳ガイドとして

——伊藤は自制心と責任感のあるガイドに成長——

ヘンリー・ルーシーはイギリスの著名な政治ジャーナリストである。1883年の夏議会休会中を利用して極東旅行をした。その時の通訳が伊藤である。この旅行記 *West by East* (1885, London) には、本稿 I-2 に示したように伊藤の手に渡ったかどうか定かではなかったバードが贈った銀の蓋付懐中時計の行方が記されていた。また漠然としていた彼の家族関係が見えて来た。一家を背負って働き、そして母と姉妹を大切にしている姿がルーシーの記述により浮かんでくる。

彼の旅行記 *West by East* 第2巻冒頭にいきなり Mr. Ito が登場するが、こ

れは伊藤博文のことで、1883年ヨーロッパの憲法調査のために渡欧して伊藤が帰国した8月以降の事であるが、当時外務大臣だった井上馨の東京郊外の別荘に招待されていた。伊藤には Ito とだけあり、Mr. は付けていない。

ヘンリー・ルーシーは、「伊藤の最初の料理^{cookery}を味わった。伊藤が駆け出しの通訳だった時、バードに雇われて、日本の内地旅行をしたが、彼女にとってかけがえのない貴重な人であったことを彼は証明した」*'We stopped for tiffin on the other side of the river and had our first taste of Ito's cookery. He is the guide who served his apprenticeship with Miss Bird, and proved a perfect treasure.'* と伊藤の仕事ぶりを評価している。

伊藤の準備する料理は **Ito's cookery** と敢えて記すほど旅行者の間で有名だったようだ。前述（Ⅱ-2）したように、実際は満25歳になっていた伊藤を21歳と思い込んでいるルーシーは、伊藤の非常に冷静で落ち着いた対応に驚いている。ルーシーに同伴しての日光旅行から戻った時だった。ホテルに戻った伊藤にホテルの主人は横浜の伊藤の家が焼失したことを興奮して伝えるが、伊藤は落ち着いて揺るぎない態度で仕事への責任を果たす。ルーシーの記述は以下のようだ。

「ホテルに到着すると、イトーは私たちの荷物を持ってついて来ているのに気付いた。私たちのガイドの名前を言うとホテルの主人に明らかな効果があった。彼の顔は馴染みの名前を聞いてぱっと明るくなったのだ。『伊藤だって』と彼は話し始めた。『伊藤さんは私の大親友です。彼の家は昨夜焼け落ちてしまった。何もかも無くなった。彼の^{n u n d e r}お母さん⁶²⁾は焼け出されてしまった。』そのような狂喜の有り様を見るのは久しぶりだった。手紙や新聞の届かない6日間の留守の後だというのに、この大変なニュースを伊藤その人本人に、いの一番に知らせる人になる稀な幸せ者だったのだ！イトーは真っ直ぐ横浜に帰宅してしまい、他の誰かが彼に伝えたかもしれなかったのだ。しばらくの

間、私はこの真に愛すべき男をしばらくイトーから離しておくか、少なくともこの報せの開示を緩やかにさせるにはどうしたらよいものかと思案していた。だがガイドその人が現れた。宿の主人は彼に駆け寄り、あたかも何か重大な祝いごとの祝福を述べるかのように手を握り、叫んだ——『伊藤さん、昨夜あなたの家が焼けてしまった。電報を受け取ったんだよ。』イトーはこのように仮借なく振る舞われた打撃に明らかに茫然自失していた。

彼はちょうど2ヶ月前に家を買ひ、『お母さんと妹を住ませた』と昨日私に言ったばかりだったのだ。いまやそれは失われてしまった。日本の家屋は絶対に保険に入っていない——それも保険契約証書を出す保険会社というものが皆無だという十分な理由からだ。『うーん』しばらくおいた後で彼は言った。その間宿の主人はもう一撃を蓄えていた。『何もかも焼けてしまった』と彼は叫んだ。『うん』男らしく僅かに微笑みながら『どうしようもないな』と伊藤は言った。事態は絶望的のようだった。宿の主人は今やすべての余力を総動員する時だった。『それで、君のお母さんは焼け出されてしまった!』と彼は喚き、穴のあくほど伊藤の表情を見つめた。『怪我をした人はいますか?』とイトーが訊ねると『誰も』と亭主はちょっと元氣なく言った。『うん、どうしようもない』とイトーは決まり文句に戻って、絶望的に言った。

この後、宿の主人は[イトーの冷静な態度に]完全にひるんで退出した。彼は旅行客をこんな風に出迎えたことは一度もなく、イトーはあたかも燃え尽きてしまったマッチ棒のように静かにそれを受け入れた。火はイトーの家の近所の他の人達にも大変大きな災害をもたらした。前に説明した横浜の日本人街のてっぺんの地点で、夜中の11時頃に出火した。火伏の神の像は速やかに引き出され、延焼地区とかわろうじて類焼を免れた家々の間の境界に鎮座した。しかし火炎は神像をあざ笑い、時々新しい境界を設けて上へ上へと移動させなかったならば

神像自体をも焼き尽くし兼ねなかった。消火水は最早ほとんど役に立たなかった。日本家屋は木と紙でできていて、その素材は西洋では通常、着火時に使われる。ひとたび燃え上がるや火は風のままに拡がり、早朝1時までには460軒が地面に焼け落ち、住んでいた人たちは家を失った。

その日私たちは夕方劇場に行く手配をしていたが、イトーの気持ちを鑑みて、私は劇場に行くのを延期しようと申し出た。しかし、イトーは最初にその報せを聞いた時に彼を駆り立てた処世訓をもって、中止することを断った。『今どうすることもできない』と彼は言った。『最終列車で横浜へ向かっても何も変わらないでしょうから』と。それでそのことは完全に満足すべく解決して、観劇に向かった⁶³⁾。』

ルーシーは家が火事になり家族が焼け出される事態に大声も出さず、慌てることもなく、ただ事態を諦めて受け止め、仕事を完遂しようとする伊藤の冷静さと責任感に驚きを隠さない。I-2に述べたバードから贈られた銀時計を四日市の海で失った時も伊藤は、わめきたてることはなく、ただ現実を諦観して受けいれ、淡々と次の仕事に掛かっていた。大切な記念の懐中時計を失った伊藤の冷静で気丈な態度を目の当たりにして、ルーシーは以下のようにいう。「しかし、家が焼失し、母親が^{madder}焼け出されたと聞いた時、冷静さを保った彼の処世訓は揺るがなかった。火と水の試練に遭って、イトーは相変わらず不平一つ鳴らさずに現れた。彼は服を火の上で返しながら『厄介な仕事だ』と言い、靴の水の最後の一滴を振り落としたが、『どうしようもなかった。最悪なのは、この塩水ってやつは乾かすのに酷く時間がかかることだ。』伊藤は極めて現実的な問題に対してのみ少々の愚痴を言う。イトーは行程を進めながら、服を乾かすことに決め、一行は9時ちょっと過ぎに人力車で京都を目指し陸路を進んだ⁶⁴⁾。』

この旅行のために新調した立派な靴が水浸しになった挙句、茶屋の女中が乾かすはずが、火鉢の上に直接置いて焼け焦げを作ってしまったのは仕方がない、立派な洋服が水浸しになろうともまた手に入れることは出来る。失われた財布も中身もまた稼げばいい、しかし彼女の贈り物である記念の銀の蓋付懐中時計はもう二度と戻らない。あきらめたかに見えた彼の胸中の無念の思いは一杯で、簡単に諦めることも、忘れることも出来なかった。京都に着き神社仏閣を訪ねた時、ルーシーはそれを知ったと次のように記す。

「祭壇のもう一方の側には、数え切れない本数の文字が書き込まれた棒が入った、蓋のない大きな箱があった。イトーは、これは寺の最も名誉ある慣行のひとつだと、こう説明した。もし心底特別な願いを抱いている人がいるならば、その人の年の数と同じ本数の竹片を持って寺に行く。一本一本に名前、年齢、望みの趣意を書く。それから年齢の数だけ寺々を廻り、通り過ぎる毎に、竹片の中の一本を木箱の中に投げ入れながら、それぞれの寺社の前で祈る。『例を挙げると』、とイトーは言った、『もし私が先日四日市湾で舟が引っくり返った時に失くした時計を取り戻したいと思ったら、私は21本の竹片を手に入れ、21度回らなければならない。でも私はそんなことはしない』と断固たる決意で付け加えた⁶⁵⁾。」

伊藤はたとえ21の寺々を廻り21本の竹筒を木箱に投げ入れたところでそんな迷信では時計が返らないことを知っている。それでももしあの時計を取り戻せるのなら彼はどんなことでもしただろう。ルーシーは、イトーはまだ海での経験を克服していない。おそらく永遠にと云う。バードが日本旅行記(*Unbeaten Tracks in Japan*)は伊藤があつてこそと、感謝を込めて贈った懐中時計は失われてしまった。それでも、バードが伊藤を忘れなかったように、伊藤もその時計と贈り主を忘れることはないだろう。そしてルーシーを

感嘆させたのは伊藤の仕事完遂に対する姿勢、彼の生き方だった。ルーシーは伊藤だけでなく、宿の主人とも英語で会話していることが分かる。彼らの英語の発音を揶揄するように母を mudder と記している。また他人の不幸の知らせの第一報者となる宿の主人の得意げな態度で東京の庶民の性格を示し、それと伊藤の落ち着き払った冷静さが対照となっている⁶⁶⁾。

5. 地理学者 エリザ・シドモアの通訳として

アメリカの地理学者、写真家で著述家であるシドモアは1884年に横浜の領事館勤務の兄を訪ねたのを皮切りに、1885年から1928年にかけて極東を旅行し何度も日本を訪れた。彼女は伊藤に関して次のように述べる。「ガイドと契約して、彼にパスポートを渡したら、旅行者はただ日本を満喫するだけです。料金は旅の最後に支払います。観光ガイドたちはガイドブックより物知りで、バード嬢によって有名になった伊藤を伴って日光と京都へ行ったのですが、さもないとあんなに楽しい体験はできなかったでしょう。宮下とそこの‘サツマイモの煮っころがし’は、東海道の旅に間違いなく喜びを与えてくれました。」⁶⁷⁾ また、次の記述からは、シドモアが雇った頃の伊藤は他の^{クーリー}従者や車夫と異なり、落ち着いた上品な態度で車夫や従者たちから一目置かれる存在であったことが伝わる。「快晴の天気に従者たちは子どものように飛び跳ね、遊び、歌い動きまわった。^{いか}厳めしい小柄なイトーでさえ冷静沈着な態度を措いて少年のようにふざけた…⁶⁸⁾」。また彼女は寺院における伊藤の様子を次のように述べている。シドモアが伊藤について述べているのはここに引用した3ヶ所であるが冷静さと快活さを兼ね備えた伊藤の成長はこのルーシーの記述でも表れている。

「絹の座布団の上に載^{dark bowl}ったりんが柔らかく叩かれると、丸々5分間にわたって、音は大きくなり小さくなり波紋のように広がり、伊藤は目を見開きでシーッとうちビルに指をあて、また僧侶たちは深く身をかが

め、恍惚の表情で音に聞き惚れている」⁶⁹⁾。

IV. 伊藤鶴吉と「通譯協志会」創立

1. 通譯協志会 カイユウシヤ KAIYŪSHA (開誘社) 設立

バードと旅行した翌 1879 年に、伊藤と通訳仲間は通譯協志会 カイユウシヤ KAIYŪSHA (開誘社)⁷⁰⁾ を設立した。KAIYŪSHA は、神戸と横浜の通訳ガイドの組合で、東京にもオフィスを構えていた (図 9)。*A Handbook of Travellers in Japan* 『日本旅行案内』⁷¹⁾ の広告に **NAMES OF LICENCED GUIDES** (ガイド免許保持者名) として所属する横浜と神戸のガイド名簿を掲載している。1894、1899、1901、1903 年の横浜の名簿 (図 9、図 10、図 11)⁷²⁾ の筆頭は、いずれも T. ITO すなわち伊藤鶴吉である。ガイド免許保持者組合カイユウシヤ (Licensed Guides' Association. KAIYŪSHA、開誘社) は通訳ガイドの組織としては、日本で最初に設立され (The Oldest Establishment of in the Kind in Japan)、組合員全員が英語を話しフランス語、ドイツ語も話せる者もいると 1901 年の第 6 版の広告中で宣伝している。また過去 22 年に亘り顧客の満足を賜っているとも記されている。1899 年の第 5 版でも創立後 20 年となっているので 1879 (明治 12) 年創立と考えられる⁷³⁾。1903 年にはオリエンタル・ガイド協会 (THE ORIENTAL GUIDES SOCIETY) が神戸・横浜に新設されて同書に広告を出している (図 11)。その神戸・横浜の名簿の前に通訳ガイド免許 (ライセンス) の発行元は **LICENCED by the Local Governments of Kobe and Yokohama** (1903 年 [第 7 版]) とあることから、通訳ガイド免許の認可元は神戸市と横浜市であったことも分かる。

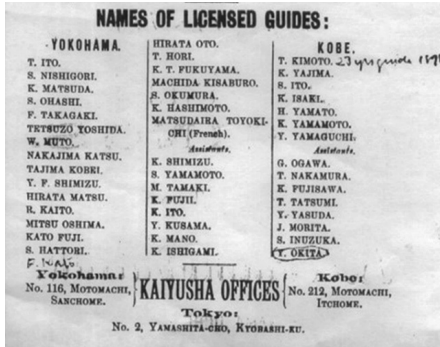


図 9. *A Handbook of Travellers in Japan* 第 4 版 (1894)
 (注) 名簿中に 3 名の Ito がいるが、トップの T.Ito が伊藤鶴吉



図 10. *A Handbook of Travellers in Japan* 第 5 版 (1899)

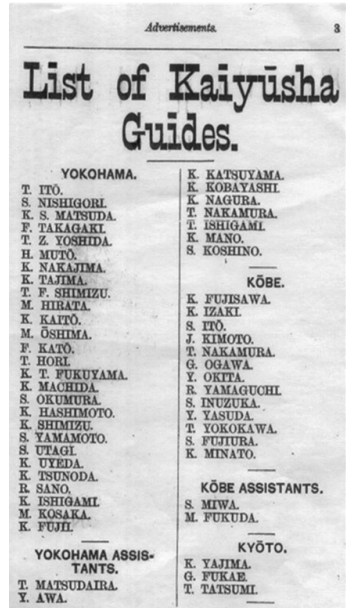


図 11. *A Handbook of Travellers in Japan* 第 6 版 (1901)
 (注) 京都にも新しくオフィスを構えたことが分かる。京都には 3 名が所属した。

日本における今日につながる独占的「通訳案内業」の法制化は、1907 [明治 40] 年 7 月 27 日付「内務省令第 21 号、案内業者取締規則」による。すなわち「第一条 通訳により諸般の案内を業とするものは願書に履歴書及び写真二通を添付し地方長官に願ひ出免許をうくべし、第二条 地方長官は試験の上免許を下附すべし、第三条 案内業試験は左の科目によりこれを行う、一 外国語、二 本邦地理、三 本邦歴史 [以下省略] 9 月 1 日施行」(官報第七千二百二十三號、明治四十年七月二十四日 土曜日 印刷局)を

以て始まった。まだ法制化以前の開港場で開港場の行政主体が免許を発行して通訳ガイドの質を維持し、また彼ら通訳ガイドたちは自ら組織を作り研鑽に励み活動していた。伊藤たちはその先頭を切っていた。

伊藤と 1883 年に旅行したシドモアは既述のように ‘The guides know more than the guide-book; And with Ito, made famous by Miss Bird, Nikko…’⁷⁴⁾ と複数でガイドたちは案内書以上に知っていると述べており、伊藤だけではなく通訳ガイドたちの水準もかなり向上していたことが窺われる。また大きいのは彼らの経験から明確な統一料金を広告中に明示していることだ——伊藤の所属していた KAIYUSHA の広告を見ると、1893 年の 3 版では、1 日当たり旅行者 1, 2 人に対し 1 ドル払う。2 名以上は一人当たり 25 セント追加、旅行中のガイドの旅行費用は雇用者が支払い、ガイドの宿賃として一日当たり 1 ドルを支払うと記されている。1894 年の 4 版では 2 人以上 2 ドルと料金は倍になり、追加料金は 25 セントと変わらないが、ガイドの旅行費用はホテル代を除いて雇用主が支払う。1899 年の第 5 版になると費用はドルから円表示に変わり、1 組 2 円 50 銭、1 人追加毎に 50 銭、ガイドの旅行費用を雇用者が支払うのは同じである。1901 年 (6 版) は 5 版と変わらない。1903 年には他は変わらないが、一組のガイド料金が 3 円に値上がりしている。1903 年に新設された THE ORIENTAL GUIDES SOCIETY^{オリエンタル・ガイド協会} の広告では、ガイド費用は KAIYUSHA^{カイユウシヤ} と同じであるが、12 歳以下は無料とするサービスを提供している、ガイドの旅行費用はホテル代を除いて雇用主が支払うとあり、これもライバル社と同じである。これに違反した場合厳しく罰することも記されている。また、ここに挙げたすべての版で、ガイドの申し込みは、長距離旅行は 24 時間前、短距離は出発の 2, 3 時間前に申し込むことと記されている。

これら詳細な料金設定は彼らガイドたちの顧客との間のトラブルの経験から設定されたものである。駆け出しの通訳ガイドだった伊藤がバードとマリーズの間であって給料の高い方へ契約を破って行ったとされた件、また彼

女が再三、伊藤は「^{うわまゑ}上前をはねる⁷⁵⁾」と記していることを思い出すと通訳ガイドとクライアントの契約にとって、金銭・日程に関することなどを掲載広告に明示し、当時の外国人の旅行者との会計を明朗にすることは不可欠であった。それは明治20年代には実現しつつあった。

2. 伊藤鶴吉の訃報に見る業績

1913 [大正2] 年1月6日に伊藤は亡くなった。喪主は息子の伊藤鶴太郎である。萬新報「ガイドの元祖」、報知新聞「通訳の元勲」、横浜貿易新報、*The Japan Weekly Mail* DEATH OF A FAMOUS GUIDE, *The Japan Gazette* 等の新聞が伊藤の訃報を載せた。死亡広告の友人代表にはオリエンタル・ガイド協会のトップ平潟清兵衛の名が載り、その葬儀は横浜通訳界を挙げて執り行われ、彼の死は惜しまれた。萬新報(図12)は、「氏は神奈川県出身にて、明治十年より通弁業に従事し、彼の米国鉄道王故ハリマン氏来朝の節通弁となりて機敏なる事務家と評せられ、帰国の際自家の経営する鉄道及び汽船の一等自由乗券を与えられたり、其他印度マイソール国イワヤール殿下、印度パロダ王殿下の通弁も勤め、英国女流作家バード嬢の日本内地旅行記には氏の功績を称讃しあり」[句点追加]と追悼し、報知新聞夕刊(図13)は、「ガイドの元祖にて現に**横浜通譯協志会**の会長なる伊藤鶴吉氏は…英語に熟達せるは勿論美術歴史に興味深かりし為四十年間従業中本邦の美術歴史を外国に紹介したる功績は決して没却すべからず、往年米国鉄道王ハリマン氏及太平洋汽船会社長シユウエリン氏等相次で来遊したる際同人は進んで其案内の任に当たり…各保有の鉄道汽船の無賃乗車を許すの特権を與へられたり、又印度王族及び幾多の貴顕紳士に説近しその賞賛の辞受けたる事枚挙に^{いとま}遑あらず」、さらに「如何なる客に出会いても如何なることを訊かれても立派に答えの出ざることなく、…初めての客に出会っても直ちに其人の氣質を呑込み…」と太字部分を拡大して伊藤の功績を讃えた。イトーは横浜の通訳の協志会の会長として明治初期の通訳案内業の成長に貢献する

一流の通訳に成長していた。また、ジャパン・ウィークリー・メール (図14) は「彼は完璧に英語をマスターし…」と彼の英語力を認めている。

伊藤の訃報記事が示すように、彼は日本通訳ガイド業の創始者となっていた。訃報記事に続くのは「観光団歓迎」という見出しで「三百八十余名の富豪観光団を載せたる独逸汽船」の横浜入港のニュースである。観光団は日光甲組 [一泊せずに日光に向かう]、日光乙組 [一泊の後日光へ] と横浜組、の3組に分かれて行動することになっており、横浜商業会議所は会頭と評議員が船に出張して歓迎の辞を呈するという記事である。明治期、商業界は早くも外国人観光客に着目しており、それを可能にしたのは伊藤ら通訳ガイドの活躍であった。



図 12. 伊藤鶴吉の追悼記事、萬新報 1913年1月9日



図 13. 伊藤鶴吉追悼記事、報知新聞 夕刊 1913年1月9日
(注) 横浜通譯協会会長とある

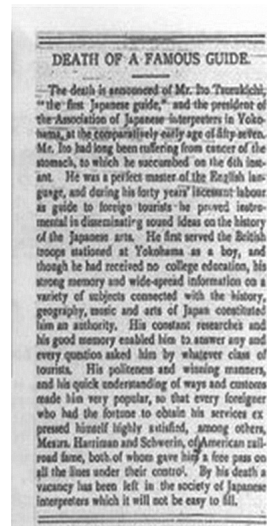


図 14. The Japan Weekly Mail, JAN. 11TH, 1913

おわりに

本稿の発端は本学故楠家重敏氏から送られてきたチェンバレンが所有していた一東の手紙集に始まった。其中にイザベラ・バードからチェンバレン宛ての手紙があった。その中で本稿に関係する部分を筆者の既出部分も含めて示した。彼女の読者であれば我が国のみならず英語圏でも著名な彼女の通訳ガイドのイトーは、その仕事の初期に、植物採集家のマリーズ、レディ・トラベラーのバード、昆虫採集家のルイスの通訳ガイドとして、幸運かつ困難なスタートを切っていた。それぞれ動植物の専門家、未知の地の踏破者との長期旅行は、科学的目的という理由で遊歩規定の範囲を越えて一般外国人の歩かない奥地までの知識と、専門知識をそれぞれのプロから彼に学ばせ、特殊な技術も身に付けさせる結果となった。イトーは彼らにとって簡単には手放せない存在となり、彼らの仕事を成功に導く助けになった。その証のひとつとなるバードから贈られたはずの銀の懐中時計の行方が分からなかったが、前述のクローニンからの連絡で結末が判明した。

また、伊藤の出生地である三浦半島の菊名、伊藤の墓のあるという根岸の墓地、葬儀の行われた寺も訪ねたが、伊藤家について判明したことはなかった。菊名には訪問当時伊藤家が2軒あり、そのうち一軒は北海道から移住してきた住職で、もう一軒は探せなかった。ただ伊藤に繋がる家の方のご協力があれば何か判明する可能性があることが分かった。

謝辞

諸先生から史料・資料提供を受けた。バードからチェンバレン宛ての手紙は楠家重敏氏、懐中時計に関してはクローニン氏、ガイド協会史料 (*A Handbook of Travellers in Japan* の広告) は金谷ホテルの秋山剛康氏、ルイスと伊藤の昆虫採集旅行行程は栃木県立博物館の栗原隆、星直斗両氏から提供された。三崎市、菊名白山神社、横浜開港資料館と挙げればきりが無い

人々のご協力をいただいた。また、白幡洋三郎・後藤和雄氏からは著作の写真使用に関して前記使用時(2013)にご自由にお使いください(ただし後藤氏は論文のみ)との言葉を戴いたので、今回も写真を使わせていただいた。ご協力をいただいた皆様に心より感謝いたします。

[注]

- 1) 初版: *Unbeaten Tracks in Japan*, John Murray, London, 1880. 省略版1巻本, *Unbeaten Tracks in Japan*, John Murray, London, 1885. 邦訳初出: 北海道部分訳: 神成利男『コタン探訪記』1968、小針孝哉『明治初期の蝦夷探訪記』さろるん書房1977。省略版邦訳: 高梨健吉『日本奥地紀行』平凡社1973、2巻本からの削除部分 邦訳: 楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子『バード 日本紀行』雄松堂出版2002、高畑美代子『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』中央公論事業出版2008。初版2巻本1880邦訳: 時岡敬子『日本紀行』講談社2008、金坂清則訳『日本奥地紀行』平凡社(2012)。以上出版年順。

この旅行記は英米の初版[1880]が両国でベストセラーとなっただけではなく、フランス語、ドイツ語等に翻訳された。1885年に省略版が出ると、省略版が*Unbeaten Tracks in Japan*として140年以上もの間世界で読み継がれてきた。本稿の引用は、30年以上の間日本でイザベラ・バードの『日本奥地紀行』として親しまれてきた高梨健吉訳(平凡社ライブラリー2003年版)を使った。初版本と省略版の相違及び問題点は「イザベラ・バードの生前に出版された*Unbeaten Tracks in Japan*の4種の版における違い」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第7号(2010年)を参照されたい。

- 2) 高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社ライブラリー(以下:『日本奥地紀行』) p. 343(第34信)、マスターはプラントハンターのマリーズ(Charles Maries)。
- 3) 同上 p. 505(第42信)。
- 4) Basil Hall Chamberlain(1850-1935), 38年間(1873-1911)に亘って在日したイギリスの日本語学および日本研究家で、海軍兵学寮の英学教師(1874-1882)の傍ら、日本語、琉球語、アイヌ語などを研究。1886年より1890年まで帝国大学文科教授、博言学、日本語学、1891年、外国人として最初の帝国大学名誉教師となる。著書に*"Things Japanese"* 1890、(高梨健吉訳『日本事物誌』平凡社、1969)等。チェンバレン宛ての手紙が書かれた状況詳細については、高畑(2013、注5)を参照されたい。
- 5) 高畑美代子「イザベラ・バードが通訳のイトーに贈った懐中時計と伊藤の顔写

真同定』『英学史研究』第46号、日本英学史学会 2013. 10。

- 6) 金坂清則 [2000] 「イトー、すなわち伊藤鶴吉に関する資料と知見」『地域と環境』No.3、高畑「イザベラ・バードの通訳兼召使・イトーについて」『日本英学史学会東日本支部』第8号、2009. 3。
- 7) 書簡には結婚前の書簡1を除いて Isabella L. [Lucy] Bishop と署名されている。バードは日本旅行直前に秘密の婚約をしていた医師のジョン・ビショップ博士と日本旅行記を出版後の 1881 年 3 月 8 日に、ワーウィクシャーのバートン・オン・ザ・ヒースのセント・ローレンスの小さな教会で結婚式を挙げた。よって、同年 1 月（エディンバラ、ラトランド・スクエア 28）の書簡1を除いて、書簡2（同年 11 月）以降は全て Isabella L. Bishop の署名である。

だが、日本旅行記 *Unbeaten Tracks in Japan* は、彼女が亡くなる 4 年前の 1900 年にロンドンの George Newnes 社から出された「新版」が Mrs. Bishop と署名されたのを除いて、削除版を含めて全て結婚後も旧姓 Isabella Bird で出版されている。
- 8) Anna M. Stoddart, *THE LIFE OF ISABELLA BIRD*, J. Murray, London, 1906, p.102. 原文：At last a servant was secured—the 'Ito' well known to readers of *Unbeaten Tracks in Japan*—and….
- 9) バードは 1879 年に日本旅行から帰国してスコットランド在住。1879 年一時帰国していたパークス公使夫人は重篤な病に倒れた。パークス嬢と夫人のイギリスでの主治医であったビショップ医師（1881 年 3 月イザベラ・バードと結婚）の連絡を受けて夫人の容態を知ったパークスは急遽イギリスに帰国したが、やっと葬儀に間に合い、そのまま 1880 年 12 月までイギリスに滞在していた。バードが時計を預けたという 1880 年の夏はスコットランドやロンドン近郊で過ごしていたが、しばしば外務省の呼び出しでロンドンに滞在していた。1880 年彼女の妹ヘンリエッタがマル島トバモリーで亡くなり葬儀はエディンバラで執り行われた。その頃この懐中時計がパークスに預けられた。書簡1が書かれた 1881 年 1 月には、パークスはイギリス滞在中で帰国予定は決まっていなかった。ちょうどチェンバレンもまた 1880 年からイギリス滞在中であったが、パークスより早く日本に戻るチェンバレンにイギリスでパークスから時計を預かって、日本の伊藤に渡してほしいと頼んでいる。
- 10) Hugues Krafft, 1853-1935；ウーグ・クラフトは 1881 年 10 月にパリを出発して、1882 年 8 月 15 日に神戸に上陸、およそ 5 ヶ月の日本滞在の後、1883 年 3 月 22 日に横浜港からオセアニック号でサンフランシスコに向けて出港した。およそ 2 年半にわたる世界旅行の後、3 月下旬に帰国した。（参考：後藤和雄編『ボンジュール ジャポン』pp. 162-172、*The Japan Weekly Mail* (March 24, 1883)）。後藤の年表では 1883 年 2 月 4 日離日となっているが、文中では、1 月 10 日の日付で、「私たちの船室は、二日後に香港から到着するオセアニック号

に予約してある」p.163とあり、1月23日は「オセアニック号の船上で」と記されている。しかし、*The Japan Weekly Mail* (March 24, 1883) には3月22日にサンフランシスコに向けて出港したオセアニック号のPASSENGERS乗船者名簿の下から3-2行目に、ウーグ・クラフト Hugues Krafft の名前が見られる。実際の離日はこの日で何らかの事情で出航が遅れたと考えられる。本稿最後に *The Japan Weekly Mail* (March 24, 1883) の出航のページ (図 15) のコピーを添付したので確認されたい。

- 11) 高畑 (2013、注5)。
- 12) Henry William Lucy, *East By West, A Journey In The Recess*, Richard Bentley and Son, London, 1885, Vol.2, pp. 49-56. 本稿引用部分は全て筆者翻訳。
- 13) 要約: *Ibid.*, Vol.2, pp. 36-56.
- 14) *Ibid.*, p. 78.
- 15) Eliza Ruhamah Scidmore, *Jinrikisha Days in Japan*, New York: Harper & Brothers, 1891. 外崎克久訳、『シドモア日本紀行 明治の人力車ツアー』、講談社、2002。
1884年に横浜米国総領事館に勤務していた兄 (George Hawthorne Scidmore) を訪ねたのが初来日。1890年には国立地理学協会 (National Geographic Society) のメンバーになり、のち女性初の理事となった。日本から移植したワシントンのポトマック河畔の桜の植樹運動で知られる。
- 16) 武藤信義 [1976] 「書評と紹介」 「イザベラ・L・バード著・高梨健吉訳『日本奥地紀行』 (東洋文庫 240) 平凡社」 『栃木史心会報』 7号 (6月)、p. 51。武藤は、「これは通訳の伊藤鶴吉が…」とフルネームで記しているが、武藤が伊藤の名前を同定したのはこれより早い時期かもしれない。伊藤逝去の翌年の1914 (大正3) 年に出版された『近代名士之面影』 [注14) 参照] では既に「バード嬢の日本内地旅行記にも氏の功績…」と示されているからである。
- 17) 金坂清則 (2000、注6)。
- 18) Charles Maries, 1851-1902.
- 19) 高畑 (2009、注5)。
- 20) 出典: 矢部信太郎編『近代名士之面影』第一集 竹帛社、1914。1914 (大正3) 年は伊藤鶴吉逝去の翌年である。但し伊藤の年齢に関しては、壬申戸籍による確認が必要と思われるが、彼の親族が出て来ないうちは、確認は難しい。
- 21) 第4信、*Unbeaten Tracks in Japan* は初版 (1880) 及び削除版 (1885) 両者に複数の邦訳が存在する。以下 *Bird* 信番号、あるいは『日本奥地紀行』信番号で示す。第17信では、新潟-山形県境の集落で酔った女性を外国人女性 (バード) に見られて恥じるイトーに対して、18歳の少年であることを強調して、彼女は「この少年はまだ18歳なのに。私は彼がかわいそうになった。」 (17信、p. 207) と述べている。

- 22) 伊藤の誕生日の安政4年12月17日の1ヶ月前の安政4年11月17日を西暦計算すると1858年1月1日となり、その前日の11月16日生まれは1857年12月31日となる。つまり安政4年は11月16日まで1857年なのである。
- 23) *Bird*, Letter IV.
- 24) 伊藤の返還時の旅券(図5)は、現在見つかった中で、年齢に関する唯一の公的史料である。
- 25) *East By West* 注12) 参照。
- 26) 伊藤家の家族構成は度々伊藤が登場する旅行記に出てくる。ここから確実なのは母と妹あるいは姉が同居していたことである。
特に母親に関しては、伊藤が母を愛し、責任を感じていたことが分かる。
父親に関しては、第4信面接時の‘They had been burned in a recent fire in his father’s house’[父の家に最近火事があって、[推薦状を]焼いてしまった]と弁解した部分のみで、これは単なる言い訳かも知れないので、真偽は断定できない。しかし大火の多かった当時としては充分ありうる話で、そうだとすれば、伊藤家は父母と子どもたちで移住してきたことになる。しかし第23信には「彼は給料の大部分を、未亡人である母に送る」‘he sends most of his wages to his mother, who is a widow’とある。またヘンリー・ルーシーの伊藤家の焼失を述べた部分によると1883年までには伊藤の家族は母とひとりの姉妹だった。
- 27) 報知新聞、1913[大正2]年1月9日、図13。
- 28) *East By West* Vol.2, p. 49 注12) 参照。
- 29) イギリス陣営地は総計37,399.55坪、フランス陣営地は山手4、838坪、山下(関内)のフランス海軍病院(530坪)の広大な敷地である。他にアメリカ(6,106坪)、オランダ(640坪)も駐屯地を確保していたが駐屯はなかった。軍用地の外に各国は貯炭所700~3,480坪を有していた。いずれも土地及び建物の権利は日本側にあった。拙稿「横浜英仏駐屯軍をめぐって」『東日本英学史研究』第16号、2017を参照。
- 30) *Bird*, Letter IV., p. 20 ‘He said that he had lived at the American Legation. …’
- 31) この邦訳書とほぼ同題のエドモンド・コトー(Edmond Cotteau)著、幸田礼雅訳『ボンジュール・ジャポン』が出版されているが、著者及び時期が異なる。コトーは日本でボアソナードと会っているが、ボアソナードは英語ではなく、フランス語通訳を連れていた。ウーグ・クラフトの著書は『ボンジュール・ジャポン』。両者の表題の・に注意。
- 32) 当時、Ito名の通訳は複数人いた。1894年のガイド広告横浜の欄にT. ITO、K. ITOの2名、1901年版にS. ITO、神戸に1名のITOが記されている。横浜筆頭のT. ITOが伊藤鶴吉である。伊藤の写真同定方法は、高畑(2013、注5)を参照されたい。
- 33) 『日本奥地紀行』第4信

- 34) 図4は横浜の植木屋で撮影された。(Hortus Veitchii, p. 80)
- 35) マリーズの極東訪問の目的のひとつは日本の針葉樹の種を手に入れることだった。Hortus Veitchii, James Veitch & Sons, Chelsea, London 1906, p. 79.
- 36) 白幡洋三郎『プラントハンター』(講談社、1994)は「少年」と訳されているが「若い従者」の方が伊藤にあてはまるだろう。
- 37) 『日本奥地紀行』第4信。
- 38) 同上
- 39) 同上
- 40) 南西の岬の Horidzumi を司令部にして、マリーズはその土地に1877年の6～10月に留まり、山地を探索し、浩瀚な昆虫学および植物学の標本を採取した。これらの標本は、昆布を積載した函館行きの船で運ばれたが、同船は翌朝に座礁し、昆布は吸水して膨張し、船を暴発させており、船長は船を海岸に打ち揚げさせた。種子を取めた箱は救出され、他の船に載せられたが、それもすぐさま転覆し、沈んだ。だが、更に針葉樹の種子を集めるには遅過ぎず、マリーズは時を移さず、喪失分を新たな採集で補った。彼は蝦夷地を英海軍艦艇 Modeste 号で離れ、新潟——日本本土南西海岸にある——に、1877年12月に到着し、内陸を横浜まで進んだ。1877年のクリスマスにマリーズは横浜を出航し香港に向かい、1878年1月2日に到着し、数日後、台湾島に向けて出航した。Hortus Veitchii 注25) p. 81.

Horidzumi はマリーズの行程中シャマニ(様似)に近い岬泉かあるいは襟裳と思われる。松島武四郎『エゾ沿革図』では襟裳岬の近くに「ポロイズミ」と記されている。

Making Horidzumi, on the south-west cape, his head-quarters, Maries stayed in the country from June to October 1877, exploring the mountains and making extensive entomological and botanical collections. These collections were shipped in a vessel laden with sea-weed bound for Hakodate, but which was wrecked the following morning; the sea-weed, wet and swollen, had burst open the vessel and the captain ran her ashore. The box containing the seeds was rescued and put into another boat which immediately capsized and sank. It was not too late, however, to still gather seeds of the Conifers, and Maries lost no time in replacing the loss by a fresh collection. He left Yezo by H.M.S. Modeste, arrived at Niigata, on the south-west coast of the main island, in December 1877, and travelled overland to Yokohama. On Christmas Day 1877 Maries left Yokohama for Hong Kong, arrived on January 2nd 1878, and sailed a few days later for the island of Formosa. (Hortus Veitchii, p. 81)

- 41) 『日本奥地紀行』第38信 p. 451。このコース変更にてイトーは反対するが、彼女は、イトーは室蘭の娘が好きになりまた会いたいからだという。しかし彼女

の本心は新たに手に入れた情報で非常に原始的な地方に住む海岸アイヌ人を訪れたいのが本心ではないかと思われる。またイトーにも早く旅を終わらせたいと思わなかったのも知れない。

- 42) *The Japan Weekly Mail* (Nov.16, 1878).
- 43) *Hortus Veitchii*, 注26), pp. 81-83.
- 44) *The Japan Weekly Mail* (Nov.8, 1878) ; ロンドン行き of イギリスの *Gleneagles* の乗船者に名前がある。
- 45) Veitch, James Herbert, *Hortus Veitchii*, London, J. Veitch & sons, 1906.
- 46) 上田卓爾「外国人案内業者に関する新たな知見について」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』2013年12月, p. 164.
- 47) 外務省外交史料館蔵。
- 48) 本稿では金坂(2000、注16)と同じ理由(KAIYŪSHA [開誘] 創設)で多忙のため、中国には行かなかったとした。
- 49) 王立地理学協会特別会員、来日1881年6月1日、離日9月18日。
Arthur H. Crow, *Highways and byeways in Japan: the experiences of two pedestrian tourists*, London, Sampson Low, Marston, Searle, and Rivington, 1883, p. 61. 邦訳: アーサー・H・クロウ、岡田章雄・武田万里子 訳『クロウ日本内陸紀行』雄松堂出版、1984。
- 50) George Lewis, 1839-1926; ジョージ・ルイスは1839年、イギリスのBlackhead of St. ジョン教区の牧師の第2子として誕生。1862年茶貿易商会の代表者として中国に行った。
1864年7月と1865年5月とに長崎で記したメモ、*BATES H.W. Trans. ent. Soc. Lond.* 1883, pp. 205-290によれば、ルイスの日本訪問は1880年2月から1881年9月。また、湯浅啓によると、1880年2月27日から1881年11月3日までとなっている。「我が甲蟲學會の恩人 George Lewis 逝く」『昆蟲』2. (2)、東京昆蟲學會、1927。
- 51) *Ibid.*, p. 61.
- 52) ルイスは日本での採集の後、1881年から1882年にかけてイギリス領セイロン(現スリランカ)で甲虫の採集をしている。Anura Wijesekara and D. P. Wijesinghe, *HISTORY OF INSECT COLLECTION AND A REVIEW OF INSECT DIVERSITY IN SRILANKA*, Cey. J. Sci. (Bio. Sci.) Vol. 31, 2003, p. 45.
- 53) Anura Wijesekara and D. P. Wijesinghe, *HISTORY OF INSECT COLLECTION AND A REVIEW OF INSECT DIVERSITY IN SRILANKA*, Cey. J. Sci.
- 54) ウーグ・クラフト、武者小路真理恵訳、後藤和雄編 [1998]『ボンジュール ジャポニ フランス青年が活写した1882年』朝日新聞社、1998。(Text original:

SOUVENIRS de NOTRE TOUR du MONDE HUGUES KRAFFT, Paris, 1884)。この本では、伊藤鶴吉は「ガイドの名前はイトーと書いて、完璧に英語が話せる」(p. 15) などと名前が記されているにもかかわらず、このイトーと『日本奥地紀行』のイトーが同一人物と確定できなかったのは、例えば長岡祥三訳 [2008] 『アーネスト・サトウの日記』にもイトーという音の人物は茶屋の主人や植木屋から伊藤博文まで 10 人ものイトーが出てくるほど一般的な姓だったからである。カイユウ社横浜には K. Ito、神戸には S. Ito の名前が見られる。

- 55) *Ibid.*, p. 256.
- 56) 『ボンジュール ジャパン』 p. 28.
- 57) *Jinrikisha Days in Japan* p. 193、注 15 参照。
- 58) バードの面接時伊藤は料理も出来ると言っている。本稿Ⅲ-2)。
- 59) 『ボンジュール ジャパン』 p. 20。
- 60) 同上 p. 21.
- 61) 同上 pp. 22-24.
- 62) ルーシーは、伊藤とホテルの支配人の会話文中、母という単語をすべて、mudder と記しているが、彼らの発音を表している。
- 63) *East By West* V 1., pp. 286-7、注 12)。
- 64) *Ibid.*, Vol. 2, pp. 53-4.
- 65) *Ibid.*, Vol. 2, p. 78.
- 66) 伊藤の家の火災の本人への第一報者となるホテルの主人のうれしさの爆発する姿をたたみかけるように記しているのは、ルーシー自身がジャーナリストであることが大きいだろう。ルーシーは伊藤の火と水の災難を新聞の三面記事のように表現している。
- 67) *Jinrikisha Days in Japan* p. 146、注 15)。
- 68) *Ibid.*, p. 174.
- 69) *Ibid.*, pp. 152-3.
- 70) 通訳ガイド社である開誘社 (KAIYŪSHA) は外国人向けのガイド会社 (組織) であるため、マレー社が出した案内書の広告は当然英語で出されており、実態は KAIYŪSHA として知られていたのがあえて KAIYŪSHA (カイユウシャ) を用いたが、マレー社の広告に英語に併記して日本語——例：大外河ホテル・館主 外河鯉太郎——が出てくるのは 1913 年版からであり、本稿年代とずれるからである。資料提供者の秋山氏も手紙には KAIYŪSHA (カイユウシャ) と記されており、KAIYŪSHA (カイユウシャ) と認識しておられた。なお「開誘社」という日本名は金坂 (2000)、p. 33 で明らかにされ、拙稿 (2009) でも紹介した。
- 71) *A Handbook of Travellers in Japan* は、1881 年の初版 (横浜、ケリー社) と 1884 年の第 2 版 (ロンドン、マレー社 [John Murray]) はアーネスト・サト

ウ (E. M. Satow) とホーズ (A. G. E. Hawes) の編集で出され、以後マレー社から第3版 (1894) から第9版 (1913) までチェンバレンとメイソンの編集で出された。入手できた広告は4版から7版 (1894、1899、1901、1903年) と1913年版である。伊藤たちが立ち上げた通訳協志会の方が『日本旅行案内』の出版より先であるが、通訳協志会が何年から広告を出したかは判明していない。この会は通訳組合あるいは通訳協会だった。

72) 図9、10、11は当時日光金谷ホテルの社長だった秋山剛康氏の提供による *Travellers in Japan* の Advertisement ページより筆者作成。秋山氏は拙稿「イザベラ・バードの通訳兼召使い・イトーについて」『東日本英学史研究』(第8号2009)をお読みになり、死亡広告中「友人総代の平濁清兵門はオリエンタル・ガイド・ソサイエティのメンバーの中にあります」という手紙と共にご自身が集められたという通訳ガイドおよび金谷ホテルの資料をお送りくださった。また秋山氏は、1907年と1913年も調べられ、連名の通訳広告はなく、篠崎という一人だけで広告を出しているだけです、と記してきた。また金谷真一著『ホテルと共に七拾五年』金谷ホテル、1954.4の一部コピーも同封してください。

73) 1894年(第4版)に20年間 during a period of TWENTY YEARS に亘りとあるのが問題だが、1899、1901年版の during the past TWENTY-TWO YEARS の年を採用した。上田卓爾「案内業者取締規則とガイドの活動について」『第25回日本観光研究学会全国大会学術論文集』2010では開誘社の明治12年創立を誤りとしている。

『日本紳士録』第4版(1897[明治]30年)と加藤大三郎『横浜姓名録』(1898[明治]31年、p. 3)には、「外国人内地旅行案内業」として、前者には、カイユウ社の広告(1894、1899)に掲載の23人中、伊藤以下12名が、後者には12名中の6名の名前がある。伊藤鶴吉、橋本喜太郎、錦織三藏、堀辰次郎、松田勝三郎、福山久太郎6人で、彼らがカイユウ社の主要メンバーだったと思われる。両書には、「外国人内地旅行案内業」としては、カイユウ社以外のメンバーの名前は見られない。19世紀終わりまでは、同社が唯一の通訳ガイド組織だったと考えられる。

74) p. 146. 注67に同じ。

75) *Unbeaten Tracks in Japan* には“squeeze”「上前をはねる」という単語が10回出てくる。最初は買弁に関してだが、高梨(『日本奥地紀行』)はこの部分だけを「搾り取る」と訳している。伊藤の雇用前から日本人の召使は「金銭の取引の度毎に分け前をはねるのである。」(前掲、第4信)と西洋人が偏見をもっていることを示している。伊藤と旅に出発すると「上前をはねる」やり方を観察し、宿の亭主と「二人で上前を分配した」、「召使は何を買うにも上前をはねる」(前掲、3ヶ所、第9信 日光山 湯元)とたたみかけている。旅に出ておよそ1ヶ月半久保田(秋田市)まで来て伊藤について述べた彼女は伊藤を褒める

一方で「私に見られないならとことんまで上前をはねていることは、疑いがない。」(前掲、第23信)と疑惑を隠さない。しかし同信終わり近くに「私は彼が少しでも私を欺すとは思わない。」(p.265)と記し、それを最後に伊藤が「上前をはねる」という記述は見られない。実際、当時西洋人を宿泊させたことのない、あるいはあったとしても極めて稀であり、西洋人の要求するサービスに対しての対価は確定しておらず、案内人(伊藤のような)と亭主との間の交渉によっていたので、亭主と2人で相談することは当然であり、その現場を目撃したバードは「上前をはねる」と思い込んだと考えられ、彼女にも相当の偏見があった。それは他の西洋人も同じで、このような状況下で外国人旅行者に価格が提示されたのは旅行業界(宿、人力車等)にも近代化が進んだことになる。

CHESS PROBLEM.

From I. B. of Bridgeport Collection.

King at K. R. White.
Queen at Q. Kt. 4.
Bishop at Q. 4.
Knight at B. 8. Black.
King at Q. 6.

White to play and mate in 3 moves.

Solution of Chess Problem of 17th March.
White. Black.
1.—Q. to K. Kt. 2. 1.—K. takes E.
2.—Kt. to K. B. sq. dia, mat. 1.—K. to Q. D. 4.
3.—Kt. to K. B. 6 dia, mat. 1.—K. to K. G.
2.—Q. to K. 4, mat. 1.—K. to K. 4.
2.—Q. to K. Kt. 7, mat. 1.—K. to Q. B. 4.
2.—E. to K. B. 2, mat.

Correct solutions received from "W.H.S." and "T.H.S."

The Problem by D. W. Clark, given in the *Canadian Illustrated News* as a three move, admits of the following solution in 2 moves, as pointed out by "W.H.S."—

White. Black.
1.—Kt. to K. 6. 1.—K. takes Q, or B. takes Q. or R. takes Kt.
2.—Mat. or K. to Q. B. 4.

SHIPPING INTELLIGENCE.

ARRIVALS.

Mar. 22, German barque *Anna Nordt*, H. Kraus, 368, from Tokyo, February 11th, cargo to Chinese.
Mar. 18, Japanese steamer *Yakushima Maru*, Matsumoto, 418, from Yokohama, General, to M. R. Co.
Mar. 18, Japanese steamer *Yakushima Maru*, Christians, 1,318, from Kobe, March 16th, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 18, British ship *Thames*, Cass, 1,161, from New York, October 13th, Kerosene and General, to M. R. Co.
Mar. 18, American ship *Chesapeake*, E. A. Foster, 1,163, from Mid. district, September 28th, General, to M. R. Co.
Mar. 19, British steamer *Osaka*, Dawson, 1,350, from Hongkong, March 14th, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 20, Japanese steamer *Suyari Maru*, Jono, 418, from Hakodate, March 17th, General, to *Kiyoko Maru* Kawasaki.
Mar. 20, British steamer *Roanet*, La Postolle, 1,119, from London and Astorway via Hongkong, General, to Messageries, Heilmann & Co.
Mar. 20, French steamer *Osprey*, Du Temple, from Hongkong, March 15th, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 20, British ship *Derby*, Commander Francis J. J. Pilot, 840, (gun, 220 H-T), from Yokohama.
Mar. 20, Japanese steamer *Nippon Maru*, J. Wyra, 1,093, from Hakodate via Okiyama, Mar. 18th, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 21, American steamer *City of Tokio*, Murray, 8,128, from San Francisco, February 14th, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 22, Japanese steamer *Yakushima Maru*, E. W. Haswell, 1,158, from Shanghai and ports, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 22, Japanese steamer *Suyari Maru*, Thomas, 500, from Kobe, General, to M. R. Co.
Mar. 22, Japanese steamer *Yasui Maru*, 407, from Yokohama, Mails and General, to M. R. Co.
Mar. 22, British steamer *Westie*, J. W. Drake, from London via Hongkong, February 14th, General, to British, Baker & Co.
Mar. 22, Japanese steamer *Koshu Maru*, Frank, 527, from Nobe, Gen. General, to M. R. Co.

DEPARTURES.

Mar. 17, Japanese steamer *Tokushima Maru*, C. Young, 1,277, for Hakodate, Mails and General, despatched by M. R. Co.
Mar. 17, Japanese steamer *Yakushima Maru*, 528, for Yokohama, General, despatched by M. R. Co.
Mar. 18, British steamer *Frederick*, Richard, 1,717, for Kobe, General, despatched by Messageries, Mail & Co.
Mar. 20, Japanese steamer *Yakushima Maru*, Christians, 1,313, for Kobe, General, despatched by M. R. Co.
Mar. 21, Japanese steamer *Nippon Maru*, W. Walker, 1,094, for Shanghai and ports, Mails and General, despatched by M. R. Co.
Mar. 22, British steamer *Osprey*, Dawson, 1,350, for San Francisco, Mails and General, despatched by O. & O. Co.

Mar. 22, American ship *Two Brothers*, Hartley, 1,353, for Vancouver, Islands, Ballast, despatched by Findlay, Richardson & Co.
Mar. 23, Japanese steamer *Nippon Maru*, J. Wyra, 1,094, for Hakodate, General, despatched by M. R. Co.
Mar. 23, Japanese steamer *Suyari Maru*, 527, for Yokohama, General, despatched by M. R. Co.
Mar. 24, American steamer *City of Tokio*, 8,128, for Hongkong, Mails and General, despatched by F. M. Co.
Mar. 24, British steamer *Osprey*, J. Yalworth, 1,406, for Hongkong, Kobe and Nagasaki, Mails and General, despatched by F. & O. Co.

PASSENGERS.

For Jap. str. *Yakushima Maru*, from Yokohama—87 Japanese.
For Japanese steamer *Yakushima Maru*, from Kobe—Messrs. A. Robinson, G. Heilmann, and 2 Japanese in cabin; and 109 Japanese in stowage.
For British steamer *Osaka*, from Hongkong—Miss R. Raymond, and Mr. G. H. Thomas in cabin; and 4 Chinese in stowage.
For San Francisco—Messrs. W. B. Spratt, H. Hoppis, Louis Mendel, Jacob Stevens, and Comber Martin in cabin; and 22 Chinese in stowage.
For *Shanghai*—49 Chinese in stowage.
For *Hankow*—4 Chinese in stowage.
For *Portland*—3 Chinese in stowage.
For *Victoria*—419 Chinese in stowage.
For French steamer *Osprey*, from Hongkong—Messrs. Andersen, Lemire, Yallier, L. Bonida, and M. L. M. Naka in cabin.
For Japanese steamer *Atsuta Maru*, from Hakodate via Okiyama—2 Japanese in cabin; and 112 Japanese and 4 Chinese in stowage.
For Japanese steamer *Nippon Maru*, for Shanghai and ports—Admiral Kusunoki, Col. Otagawa, Mr. and Mrs. Ishiyama, Mr. and Mrs. Kashiwa, Mr. and Mrs. Harada, Mrs. Mitsu Kato, Messrs. G. I. Masay, Col. S. Aikawa, E. Kato, E. Tani, T. Hayashi, K. Wakajima, F. Sakai, Koyama, and Tanaka in cabin.
For American steamer *City of Tokio*, from San Francisco—Mrs. W. J. Booth, Miss M. Lewis, Bart, and Mr. G. H. Appleton, and Infant General John Lee, Miss M. C. Goodley, Miss F. Harper, Miss A. Doughty, Mr. and Mrs. Moran, Messrs. R. A. Robertson, T. B. Glover, E. D. Brown, H. Haselbeck, J. Stenbeck, L. Zwick, in cabin; and 5 Europeans in stowage.
For Hongkong, Mr. T. Covill, and Rev. C. E. Hagar in cabin; and 130 Chinese in stowage.
For Japanese steamer *Yakushima Maru*, from Shanghai and ports—Mr. and Mrs. Muro, Mr. and Mrs. Wood and child, Miss Wood—ad and 2 child, Messrs. W. B. Russell, G. S. Cook, Frank M. Ashby, U.S.N., A. B. Brown, E. Abbott, G. O. McGeehan, D. Fraser, Leona, Yamawaki, Matsumoto, Aida, Yoda, Ake, Okamoto, Nishikawa, Mitsuaki, Shimizu, Matsumoto, Taniuchi, Saito, Morioka, Marukita, Kubota in cabin; and 3 Europeans and 250 Japanese in stowage.
For American, Mr. Sag. Edmond in cabin.
For British steamer *Osaka*, for San Francisco—Messrs. Jacob Stevens, F. Howard, and B. Cole in cabin; and 4 Europeans and 20 Chinese in stowage.
For New York—W. B. Spratt, Rev. M. H. Heston, and 4 children, Messrs. F. M. Ashby, Shiroaki Shigei, Sag. Edmond, and J. T. Van Rossum in cabin.
For London—James Morris in cabin.
For Liverpool—Mr. and Mrs. Archibald Clark, Miss E. K. Douglas, Messrs. R. Dugdale, R. H. Burns, A. Payne, and Louis Micalis in cabin.
For Paris—Hugues Knef in cabin.
For Honolulu—491 Chinese in stowage.
For Victoria—410 Chinese in stowage.

CARGOES.

For Japanese steamer *Nippon Maru*, for Shanghai and ports—Tonnage, 2,300.00.
For Japanese str. *Himelung Maru*, from Shanghai and ports—Tonnage, 918,825.00, for America, 11,100.00.
For British steamer *Osaka*, for San Francisco—

TEA:					
From	San Fran.	N. York	Other Cities	Total	
Shanghai	—	—	2,372	2,372	
Yokohama	—	—	848	848	
Hongkong	170	441	1,929	2,540	
Yokohama	1,195	365	83	1,643	
Hongkong	—	—	—	—	156
Total	1,465	806	3,062	7,216	

SILK:					
From	San Fran.	N. York	Other Cities	Total	
Shanghai	—	149	—	149	
Hongkong	—	185	—	185	
Yokohama	—	377	—	377	
Total	—	712	—	712	

REPORTS.

The Japanese steamer *Yakushima Maru*, Christians, reports—Left Kobe on the 18th instant, at 6 p.m. Experienced strong north-westerly wind and fast weather. Arrived at Yokohama on the 18th instant, at 11.13 a.m.
The British steamer *Osprey*, Captain Davison, reports—Left Hongkong on the 12th instant, at 3.20 p.m. To anchor on arrival along N.E. monsoon and heavy rain; thence to port on the 15th instant, at 6.15 a.m. Wind and sea weather. Arrived on the 15th instant, at 6.15 a.m.

図 15. ウーグ・クラフトの横浜出港の記事 *The Japan Weekly Mail* (March 24, 1883)

クラフトの離日に関しては、注 10) を参照されたい。

(ながお・しろう 名誉教授)

(たかはた・みよこ 英学史研究家)